

Bulletin ²⁷⁷

2018 秋号



COLONNADE

JIA環境会議／東北支部宮城地域会 みやぎボイス

FORUM

改めて登録建築家を考える／海外レポート／覗いてみました他人の流儀／建築写真について
建築見学ツアー／温故知新／活動報告／日本版CABEを考える／わたしの愛用ツール



超高層ビルで培ったノウハウを 戸建て住宅向けのインテリア階段に展開

株式会社横森製作所は、1951年に東京・板橋区で創業。当初は建築金物の設計、製造、施工をしていましたが、1960年代後半からゼネコンを中心に鉄骨階段の注文が増え、ファブリケーターに代わり鉄骨階段を専門につくるサブコンとして成長しました。確かな精度とスピーディーで低コストな生産ライン・流通ラインが整備され、高品質な製品を全国に届けています。近年は、これまで培った技術を住宅にも生かそうと住宅事業部を立ち上げ、2004年に住宅向けインテリア階段「SYSTAIR」を開発。現在、戸建て住宅向け階段として展開しています。住宅事業部の安藤正徳さんにお話をうかがいました。

スチール製インテリア階段 「SYSTAIR」を開発

日本のビルの高層化とともに、鉄骨避難階段を製作し70年近くになり、今では日本の超高層ビルの8割に当社の製品が採用されています。現在オリンピック関連施設やホテルなど、大型プロジェクトが活況を呈している中で、今後の建築需要を考えると、当社も新たな事業を展開する必要があると考えました。

近年、住宅でリビング階段の様式が増え、開放感があって意匠的にも満足するスチール製の階段のニーズが高まったこともあり、新たに事業部をつくって、2004年に戸建て住宅向けのスチール製インテリア階段「SYSTAIR」の提供を始めました。

住宅であれば規格化して量産できそうだと安易に考えていたのですが、構造も違えば、躯体取り合いや階高寸法もさまざま。さらに住宅はビルと比べて、現場での微調整を必要とする作業も多く、ゼネコンの仕事と比べて手間が多く掛かることに驚きました。

当社の階段は建築の仕上げ段階で現場組み立てしますから、必ず図面通りに躯体があがっているかを確認し、スピーディーに製作しなければなりません。逆に言えば、やはりプロでないと正確に納められなくて、海外で量産できるものではないからこそ、「階段屋」の当社が手掛ける価値があると思っています。



施工例 黒のイナズマ形のササラに、踏板はウォルナット化粧板貼

高品質な階段を オーダーメイドで一品生産

「SYSTAIR」は、ディテールは標準化を進め、段数や有効幅、踏み面などの寸法は個別に設計して製作します。さらに、ササラのデザインや踏板、手摺のバリエーションも多数あり、オリジナルの階段をつくることができます。

建築家の方は一から自分で設計する方が多いかもしれませんが、鉄骨階段を扱うノウハウがないと、設計にも時間がかかり難しい面があるでしょう。当社の製品は、オーダーメイドであり

ながら、限られた納期と予算の中で正確できれいな階段を提供することができます。現在では、大手ハウスメーカーや中小工務店からのご注文が増え、建築家の設計による階段の製作も行っています。本社近くにはショールームもありますので、ぜひお気軽にお問い合わせください。

■当社は、11月4日(日)に現在日本一の高層ビルあべのハルカスで開催される階段マラソンの世界大会「ハルカス・スカイラン2018」をメインスポンサーとして応援しています。階段はもちろんヨコモリ製です。こちらもぜひご注目ください。

YOKOMORI 株式会社 横森製作所

<https://www.yokomori.co.jp>

階段専門メーカーとして、ビルの内部・外部階段、装飾・らせん階段、手摺に加えて、簡単にオーダーできる戸建て住宅用のインテリア階段も取り扱っています。

■本社・住宅事業部(東日本支店)

東京都渋谷区幡ヶ谷1-29-2 TEL: 03-3460-9229 FAX: 03-3469-9319

■ショールーム

東京都渋谷区西原 京王新線 幡ヶ谷駅(新宿駅から2駅)より徒歩5分 (詳細はご予約時にご案内します)

営業時間: 平日(月～金) 10:00～16:00 ※予約制 申し込み: 住宅事業部 TEL: 03-3460-9229

CONTENTS

COLONNADE

4 JIA環境会議

地球環境を視野に入れて地域の文化や風土を活かした環境活動を！
—JIA環境会議の活動紹介—

エステック計画研究所 小玉祐一郎
イトウ・アーキテクト・オフィス 伊藤正利
大野二郎環境建築研究所 大野二郎
白江建築研究所 白江龍三
寺尾三上建築事務所 寺尾信子
長井淳一建築アトリエ 長井淳一
袴田喜夫建築設計室 袴田喜夫
松田平田設計 宮田多津夫

8 東北支部／東日本大震災 宮城からの発信

東北支部宮城地域会 みやぎボイス
地域の建築家と復興・まちづくりのプラットフォーム

関・空間設計 渡邊 宏
都市建築設計集団／UAPP 手島浩之
SOYsource建築設計事務所 櫻井一弥
SOYsource建築設計事務所 安田直民
東畑建築事務所 佐伯裕武
楠山設計 阿部元希

FORUM

10 連載：改めて登録建築家を考える 第1回 建築家資格制度の歴史

近藤総合計画事務所 近藤 昇
ASCO.partners 安達治雄
内野設計 内野輝明

12 海外レポート 上海の残照 —老街が創る新しい空間価値—

日本設計 安部貞司

14 覗いてみました他人の流儀 池田昌弘氏に聞く 構造家とはじめから一緒に考えると建築はもっと自然になる

Bulletin編集WG

17 連載：建築写真について 1 都市と街の中で写真を撮る・こと

兼松設計 兼松紘一郎

18 建築見学ツアー 白樺湖夏の家

工学院大学建築学部 鈴木敏彦

20 温故知新 コンペ／時代／夢

日本大学理工学部建築学科 今村雅樹

21 抱負を語る 「温め続ける」こと「進化する」こと

アトリエマナ 河内真菜

抱負を語る 七徳堂の挑戦

綾井新建築設計 綾井 新

22 活動報告 交流委員会Cグループ 2018年交流委員会C、Dグループ合同ゴルフコンペ

オイレスECO 若澤一幸

23 交流委員会Eグループ JIA活動と新しい時代への幕開け

きんでん 若佐明継

24 目黒地域会 一般の方を交えての建築展覧会

ゼロワンオフィス 伊藤 正

25 城北地域会 分かる景観から知らなければならぬ景感へ

ECO都市環境計画研究所 色川善一

26 新潟地域会 月例会の活性化

平原設計事務所 平原 茂

27 日本版CABEを考える 景観まちづくり協議会と「景観デザインレビューのススメ」

アール・アイ・エー 砂金宏和

28 わたしの愛用ツール 3つのスケール／アプリ「Sun Seeker」／アプリ「Tayasui Sketches」

BACKYARD

29 広報からのお知らせ／支部会報誌『Bulletin』原稿募集

30 ひといき 「こども職業体験(こどもお仕事まつり)」に参加して

V建築設計室 宮島 亨

30 編集後記

31 JIA建築家大会2018東京 終了の御礼

2 パートナーズアイ 株式会社横森製作所 超高層ビルで培ったノウハウを戸建て住宅向けのインテリア階段に展開

公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館

Tel: 03-3408-8291(代) Fax: 03-3408-8294

<http://www.jia-kanto.org/members/>



地球環境を視野に入れて 地域の文化や風土を活かした環境活動を！

—JIA 環境会議の活動紹介—

執筆者 議長 小玉祐一郎、伊藤正利、大野二郎、白江龍三、
寺尾信子、長井淳一、袴田喜夫、宮田多津夫

持続可能な社会の実現に向けて

JIAが他の建築関連団体とともに「地球環境・建築憲章」を制定したのは2000年です。地球環境問題と建築のかかわりを認識し、持続可能な循環型社会の実現に向かって取り組むと宣言しました。

2015年11月、COP21パリ会議では、各国の事情に応じた温暖化ガスの削減目標が決められ、日本では2050年までに80%を削減する長期戦略づくりが始まりました。都市・建築分野にも削減目標が設定され、政策的な制度や基準の整備が急がれています。

同年の国連サミットでは、気候変動に対する具体的な対策を含む広い分野にわたる17の持続可能な開発目標(SDGs)が採択されました。さまざまな国、地域がこの目標に対してバランスの良いアプローチを行う試みが始まっています。

東日本大震災をはじめとする近年の災害は、多様な気候風土に適応した暮らしの知恵やライフスタイルの伝承が大切であることを改めて思い起こさせるものでした。地球環境負荷の削減というグローバルな対応を引き受けながら、ローカルな視点に立つ発想が求められています。持続可能な社会のビジョンを構築し、提案する建築家の想像力に期待されています。IoT、AIなど新しいテクノロジーの成果を取り込みながら、人間と自然の持続可能な関係を考えることが、今私たち建築家に課せられた課題です。



「JIA 建築家大会2017 四国」開催期間中の懇親会

JIAは2013年度より公益社団法人に移行し、組織改編に伴って「全国会議」という新たな4つの本部委員会が設けられました。環境会議はその一つとして発足し、それまでの環境行動委員会の活動を引き継ぎました。新しいJIAは全国ネットワークをこれまで以上に強化し、地域の文化や気候特性を活かした活動を展開すべく情報交換と社会への発信を行っていきます。環境会議は各支部における環境に関わる活動と連携し、共通のプラットフォームとしての役割を担います。

毎年、JIA大会において、全支部の代表委員をはじめ全メンバーが集まり定例会議を開催します。また、隔月にWEB会議を開催し議論を重ね、各種活動を実施しています。

JIA大会では、ホスト支部が中心になって「環境シンポジウム」を開催してきました。2016年大阪のテーマは「ZEB & ZEH + α 」で、定量的に明示される環境性能と建築の持つ多様な魅力との関係が問われました。2017年の徳島では「環境の土着」というテーマで、四国の剣山系の豊かな自然と共生する伝統的な農村集落を対象に、生き続けるバナキュラーな知恵の今日的意味が再考されました。

環境会議にはRU(リサーチユニット)と呼ぶ目的達成型のプロジェクトチームがあります。これまで、伝統的工法の住まい、環境データ評価、エコハウスフォローアップ、国際交流、再生可能エネルギー、環境建築ガイドブックの6つのRUが設置され、成果を出してきました。RUの成果は、後述する出版物として公表されています。

以下にいくつかの近年の活動を紹介します。

環境建築の魅力を発掘し、広く知ってもらう

JIA環境建築賞は今年で19回目を迎えたJIAの重要な環境活動です。第1回は2000年に実施されました。初代審査委員長は池田武邦氏です。以降これまでの19年間にわたり歴代の審査委員長、審査委員の方々のもとで、環境建築の新しい可能性を見出してきました。

この間の省エネルギー技術や建築部材は著しく進歩し、コンピューターに支援された設計技術も急速に進歩しました。それらをどのように活かし統合したのか、そもそもどのようなライフスタイルを設定したのか、建築家の創造性は作品から読み取るしかありません。環境建築の魅力を発掘し広く知ってもらうために、環境建築賞の役割は年々重さを増してきています。

2016年度は全国から48作品（一般35、住宅13）の応募があり、最優秀賞に森下修氏設計の「HEXAGON/Aron R&D Center」を選定。最後まで竹中工務店の複合化超高層「あべのハルカス」と競り合いましたが、最後はJIAらしい自然と共にある建築が選定されました。

2017年度は全国から36作品（一般19、住宅17）の応募があり、一般建築部門では、簾のダブルスキン、天井輻射冷暖房で新しいワークプレイスを実現した「YKK80ビル」（設計：亀井忠夫、中村晃子、土屋哲夫、水出喜太郎／日建設計）が最優秀となり、病院に木構造のインテリアと環境デザインをスマートに展開した「新柏クリニック」（設計：吉岡有美、菅原努、那須律男、廣田聡史／竹中工務店）が優秀賞に選定されました。住宅部門では、オフグリッドで建築家自らがZEBに挑戦した「佐戸の家」（設計：佐藤欣裕）が最優秀に、「ソーラータウン府中 木造ドミノ住宅」（設計：野沢正光）が優秀賞に決定しました。



2017年度 第18回 JIA環境建築賞公開審査会

2017年度から、入賞数を限定するために公開審査に残った作品を「優秀環境建築選」とし、「最優秀賞」「優秀賞」の各1点を選定することになりました。

「環境建築」とひと口に言っても形態・プログラムは多岐にわたり、最近では素朴な快適空間から、ストック再生、地域性の継承、LEEDやCASBEE評価、ZEB、ZEHなどの重装備な環境装置にいたるまでさまざまな解があります。しかし、安田幸一審査委員長が今年度の応募要項に示しているように、近年は環境装置の利用に頼りすぎ、古来日本建築が有してきた素朴な自然とともにある生活意識が失われつつあるように思われます。このような状況の中で、JIA環境建築賞が環境デザインの羅針盤となり、環境に配慮し人のためになる空間とは本来どうあるべきかを根本から考え直すことが必要です。

環境会議は、単体の建築だけではなく、まちづくりやストック再生などでの活動にも視点を当てて、一般社会と共生するJIAの環境活動の一環としてこの環境建築賞をさらに飛躍させたいと考えています。

木材利用促進セミナー

温暖化対策に対して建築分野ができることを学ぶ

2013年より木材利用促進セミナーを開催しています。空気中の二酸化炭素を蓄積した木材を建築として利用し、木材を切り出した跡に若木を植えることにより炭素固定を継続しています。それが、建築分野でできる唯一の空気中の二酸化炭素削減策だからです。

地球の気温上昇を産業革命以前に比べて2℃以下に抑

えるために、先進国は1990年頃に比べて80%以上の温室効果ガス排出削減が必要であり、建築分野ではストックを含めた全ての建築が2050年にはゼロエネルギーまたは再生可能エネルギーのみによって稼働できるようにしなくてはならないと予想されています。しかし皆さんが今設計している建築はゼロエネルギー建築でしょうか。

今生活している住宅は2050年までにゼロエネルギー化できるでしょうか。また、最近の異常気象の状況をみると、2℃以下という目標は楽観的すぎるかもしれません。温室効果ガス排出削減だけの温暖化対策は破綻しているように思われます。第二の方法である「すでに排出してしまった二酸化炭素を回収する」対策が必要です。今世界は建築の木質化に向けて急速に進んでいます。

木材利用促進セミナーは、この状況をできるだけ先取りしデザイナーも楽しめるようなテーマを取り上げています。2015～2016年に開催した第4回・第5回では木材認証を中心に取り上げました。オリンピック施設で使う木材は、適正な木材循環が確認された認証材でなくてはなりません。しかし、日本では認証制度が普及していなかったために輸入材を使わざるを得ない可能性があり、木材認証の重要性を啓発する企画になりました。幸い、

第5回のセミナーでオリンピック用木材はギリギリ確保されたことが報告されました。第6回・第7回の2017年頃になると、若手建築家を中心に一斉に木質建築を手がけるようになりました。海外で大型木質建築を手がけた人たちも帰国して活動を始めるようになり、若手建築家の作品や海外事情の紹介を通して、実務に携わる建築家の問題意識の共有と交流の場となるような企画として企画の主体も若手に移行しています。今後、社会の変化に応じて、タイムリーなセミナーを展開していきます。



第7回木材利用促進セミナーのポスター

出版

環境建築・都市について出版物を多数発行

JIA環境会議では環境行動委員会の頃から出版に力を入れて、2005年『「環境建築」読本』（彰国社）、2007年『環境建築ガイドブック』（企業組建築ジャーナル）、同年『2050年から環境をデザインする』（彰国社）、2014年『エコハウスへの誘い』（鹿島出版会）、2017年『環境デザインの授業』（エクスナレッジ）と通算5冊を刊行してきました。環境建築ガイドブックRU（リサーチユニット）の活動として、昨年刊行した『環境デザインの授業』を紹介します。

本書は当初前述の2007年に発行した『環境建築ガイドブック』の第2弾として企画されましたが、企画を進めるうちに、優れた事例を紹介するより何をもって環境建築を評価するのか改めて考えることが重要と考え、最終的には都市・建築と環境の関わりを考える上での手かかりを70のキーワードにまとめた形となりました。

序章「環境建築を考える視点」の「パッシブ型の環境建築の思想」、「流域：持続可能な都市の範囲」、「既存ストックの活用」、「持続可能にするマネジメント」は、その後続く本編のキーワードをどのような視点から選んだかを示す導入部であり、それを受ける第1章は環境建築の設計手法として「パッシブ型環境建築の設計手法」を提示、第2章は建築ストックと省資源という切り口でストック活用型社会においてあるべき環境建築の役割を

考察しました。第3章、第4章は持続可能な都市像の提示と、持続可能にするエネルギーの活用について述べています。

地球温暖化、エネルギー（原発）の問題、人口減少、今の日本はさまざまな問題が山積しており「環境」という言葉の含む意味は多岐にわたります。いくらでも増えていくキーワードを70に絞る作業は困難なものでしたが、持続可能な環境における都市・建築のありようを我々なりに見つめなおす機会となりました。



これまでに刊行された出版物

環境、環境デザインに関する情報発信交換の場として、隔月で開催

活動の頻度を上げてタイムリーな情報を発信・交換したいと考え、2017年から隔月で環境懇話会を開催しています。さまざまな分野の話し手から、ワイン片手に広く環境のことや環境建築デザインに関する興味深い話をうかがうサロンの会です。

第0回「私が考える環境建築」彦根アンドレア、第1回「空気集熱式太陽熱利用のできることにパッシブソーラーシステムの可能性」武山倫／小池一三、第2回「ジェフリー・バワの現代的意味」金子尚志、第3回「蒸暑アジアの建築・エネルギー・サステナビリティ」高口洋人、第4回「ホーチミンとハノイの竹建築に見るヴォーチョン・ギア事務所の取り組み」木下庸子／大野二郎、第5回「在台湾14年で思う古今〜咸臨丸同行者“松崎萬長”元子爵建築家と最新の台湾サステナビリティ志向」加藤義夫、第6回「イギリスにおけるCLT建築の現況」小見

山陽介、第7回「アジア建築のいま：南方からの便り」国広ジョージ、第8回「風のかたち、熱のかたち、建築のかたち」末光弘和、第9回「Computational Design & Digital Fabrication」竹中司、第10回「持続可能建築と再生可能エネルギー」Cinzia Abbate／Tjerk Reijenga／彦根アンドレア／戸部芳行、第11回「エネルギー自給自足の建築と暮らし」佐藤欣裕。

以上をこの2年間で12回開催し、多彩な面々をお迎えして中身が濃く分野も広い議論をしてきました。今後も環境懇話会として広く建築家の皆さんと交流し、“環境建築デザイン”の知見を深める取り組みを行っていきます。



第9回 JIA 環境懇話会のポスター

関東甲信越支部環境委員会／支部活動との連携

関東甲信越支部では地域会と連携して活動しています

「JIA環境会議」の発足と同時期に、関東甲信越支部では10支部初の「環境委員会」を組織し活動をスタートしました。関東甲信越支部・環境委員会は最も大きな支部の委員会として、地域会との連携を重要な活動目標と捉え、以下の活動目標を掲げました。

1. **地域会との共催および支部全域を対象とした実践的行事の開催** 建築専門家向け、市民向け等のセミナーや見学会等
2. **タイムリーかつ速報的な情報の発信** ホームページ等を活用した情報の発信と蓄積
3. **低炭素社会推進に資する対外的活動** 他団体ならびに官庁・自治体との連携に基づく社会的活動

この活動目標に沿って、省エネセミナー2014(群馬地域会)、省エネセミナー2015(長野地域会)、再生可能エネルギー利用と建築デザイン(関東甲信越支部住宅部会と共催)、目黒街かどトーク「自然に優しい暮らし方」(東京目黒地域会)等をサポートしました。詳細な活動内容については、『Bulletin』2018夏号の2017年度報告とセミナー報告を参照ください。

今年行われた「再生可能エネルギー利用と建築デザイン」のポスター



■今期から、過去4年の経験を踏まえて関東甲信越支部の特徴を活かした新しい役割に取り組みます。関東甲信越支部は、都内で開催される行事や中央官庁からの情報入手、JIA環境会議との協力体制に有利性があり、その利点を活かす責任があると考えています。一方、環境というテーマは地域ごとに多様です。支部内の広域にわた

る各地域会が互いにアクセスしやすい環境を整え、さらに全国10支部のJIA環境会議委員と協力し、他支部の活動情報を全国で共有・活用可能にするネットワークの構築に取り組みます。これが結果として関東甲信越支部の各地域会に還元され、発展的な流れになることと確信し、活動を進めていきます。

東北支部宮城地域会 みやぎボイス

地域の建築家と 復興・まちづくりの プラットフォーム

東北支部 宮城地域会（JIA 宮城）

みやぎボイス
連絡協議会代表



渡邊 宏



手島浩之



櫻井一弥



安田直民



佐伯裕武



阿部元希

東日本大震災から7年半が過ぎました。福島県浜通りの浪江町、双葉町、大熊町を除いて、当時を知る人、現場を訪れて被害状況を知った人以外、被災の痕跡に気づくことが少なくなりました。一方、すべての被災地で暮らしと生業の現場に入り込むと、一人ひとりの深い記憶と葛藤を知ります。

絶えず自然災害が起きています。カタチを変えながら新たな「被災地と被災者」が生まれています。



「みやぎボイス2013」
会場風景
(会場：せんだいメディアテーク、オーブンスクエア)

みやぎボイス誕生

震災直後からすべての人がそれぞれの現場で感じていたように、私たちJIAの仲間も被災地で活動するたびに「地域の建築家の孤立」を深く感じていました。

2012年秋、JIA東北支部では復興シンポジウム「つながるボランティア」「震災復興と専門家の連携」を開催しました。建築まちづくりの専門家と実務者が中心でしたが、それまでの1年半の「孤立」からは当然の流れでした。

これをきっかけに「地域経営の視点と活動」とそれに関わる一人ひとりとの「連携」を強く感じたJIA宮城の仲間が集まり、地域の建築家として何ができるのかを議論し、「建築を越えて」「それぞれの孤立からの脱却」「みんなで現場を知る」「復興の姿とプロセスの共有」を問いながら、「連携と協働」「経験と知見の共有と継承」を目指した“場”の構築を考え始めました。

震災直後から地域の建築家として何ができるか？ 復興計画や支援の提案を行いました、ほとんど実現しませんでした。その時痛感したのは“日頃から顔の見える関係”の大切さでした。その自問の中から、地域のまちづくりに携わる関係者が集うプラットフォームで、地域固有の問題

に精通する立場の異なる者同士が、知見や情報を共有することによって、関係者の能力を相乗的に活かし、困難な局面の打開につなげ、さらにその日頃の「関係」が地域との持続的な「協働」さらには「信頼」を育み、「孤立からの脱却」につながる、と考えました。

プラットフォーム構築と経験・知見の共有・継承と協働から、シンポジウムのデザインが問われました。登壇者がステージに、オーディエンスが客席で拝聴するカタチではなく、関係者と市民が一堂に会し、一度に複数のテーマに向き合うこと、一人ひとりの経験・意見の共有を考えた結果、3つのラウンドテーブルで同時進行のシンポジウムが生まれました。それを引き出したのが「せんだいメディアテーク」でした。3つのテーブルで同時に進行するスタイルに、最初は登壇者もオーディエンスも戸惑っていましたが、次第に隣のテーブルの熱気を感じながら討議に集中、そこから発せられた声は発言者自身の声として共有されていき、「みやぎボイス」の特徴となっていきました。企画の過程でニューヨークの“Village Voice”が話題になり、ジャンル横断的で既成メディアとは違うその情報誌にあやかって「みやぎボイス」と名付けられました。



「みやぎボイス」レイアウト図

地域とずっと一緒に考える

第1回は2013年4月、発案して3ヵ月での開催でした。テーマは「地域とずっといっしょに考える復興まちづくり」。このテーマに地域の建築家の覚悟を込めました。1日目は、JIA宮城が高台移転やまちづくり委員会支援で活動している被災地石巻市北上の皆さんを中心に、「なりわい」「すまい・高台・土地利用」「医療・福祉・教育」をテーマに課題を“深掘り”し、2日目はその論点を受け、被災地で活動する行政、学識者、弁護士、建築まちづくり専門家、ジャーナリストが“広く”「すまい」「まちづくり」「協働」について意見交換を行いました。被災2年後の混乱期でしたが、プラットフォームに多くの方が賛同、JIAの芦原太郎会長（当時）をはじめ、全国から支援と参加をいただきました。

2014年は災害公営住宅の整備を視点に「復興住宅のこえ—住まいの再建から見る宮城の復興」を、2015年には新たな土地と住まいでの暮らしの始まりに合わせて「復興で橋渡しするもの」を開催しました。

震災から5年目となった2016年は中間総括と位置づけ、「これまでの復興とこれからの社会」をテーマに、復興全般を振り返り、暮らし・生業・伝承と次の災害に向けて「これから」を論じました。報告書には333人のそれぞれの当事者の復興の声「何を考え、何をしようと試みたのか」をまとめ、アーカイブとしての蓄積を図りました。

2017年には「計画・制度とそこから^{こぼ}れ落ちるもの」をテーマに、弁護士会をはじめ土業13団体が加わり、ハードが先行し話題となりやすいなか、「零れ落ちるもの」と「そこからの解決」に焦点を当てました。弁護士会の活動から、報道からは見えない在宅被災者など「隠れた被災者」と求められる支援があぶり出されました。



「みやぎボイス2018」
フライヤーの表面と裏面

みやぎボイス2018

今年9月2日には、第6回となるみやぎボイス2018「次の社会の在り方につなげる試み」が開催されました。日本建築学会東北大会に合わせて、これまでのみやぎボイス連絡協議会（構成団体はJIA宮城、みやぎ連携復興センター、東北圏地域づくりコンソーシアム、宮城県災害復興支援土業連絡会、宮城県サポートセンター支援事務所）と建築学会の共催となり、プラットフォームがさらに拡大しました。その結果、3テーブル×3ラウンド計9テーブルで、広範囲なテーマについて論じ合うことができました。

私たち自身の課題として、「若者の参画」「専門家の役割と能力」「整備する空間の価値」の大切さをあらためて確認しました。福島のテーブルでは、原子力災害の責任が見え難い中、これまでの「情報・判断・行動」の知見では応えきれない現場での、真摯に「それぞれの復興」に向かう一人ひとりの取り組みが、九州のテーブルでは、繰り返される「初期行動」での混乱が話し合われました。ここでも「顔の見える人と知見のプラットフォーム」の価値が確認されました。

共通しているのは「意思決定のプロセス」と事業成果との関係です。次に向けて成果と課題の検証が必要です。なぜなら、今までの経験と知見が次の社会をつくっていくからです。

みやぎボイスの課題

みやぎボイスの企画運営は、初期はJIA宮城が中心的に担ってきましたが、プラットフォームが拡大されるにつれ協議会での協働へと変わっていきました。最大の課題は財政基盤です。シンポジウム開催に対しては共催団体からの拠出金と報告書売上と寄付金、2016年からは「新しい東北」からの助成を受けています。会場費、登壇者の宿泊交通費、事務局経費、報告書印刷・発送が主な支出で、それ以外は協議会とJIA宮城と東北支部協会の無償の支援によって実現してきました。みやぎボイスのようなプラットフォームでの活動は、モノ・コト・カネによる直後の支援とは異なり、財政基盤が脆弱です。来年以降の継続については新たな財政基盤の構築が避けられません。

厳しい状況の中、建築まちづくりでの「連携と協働のプラットフォーム」と「経験と知見のアーカイブ」を活動の目標としたこれまでのみやぎボイスの手応えが、私たちを動かす大きな力となっています。

復興と建築まちづくりは地域ごとに違います。普段から継続的なそれぞれの「地域経営の視点と活動」が大切です。制度や前例では応えきれない「隙間を埋め」「一人ひとりの特徴を知りそれに応える」ために、戦後70年の成功体験に固執しない、互いの「顔」を知り、地域社会の「全体像」を共有し「読解力」を高める“場”として、プラットフォームのひとつのカタチ「みやぎボイス」が寄与できると確信しています。



報告書「みやぎボイス」購入による支援をお願いします。
詳しくは、JIA東北支部HP—宮城地域会ブログをご覧ください。

みやぎボイスの成果

「みやぎボイス」のプラットフォームでの活動は、JIAの建築家の社会化・地域化、さらに連携・協働の深く広範囲な展開と、そして何より私たち自身の成長に繋がったと実感しています。6回目の「みやぎボイス」を終え、改めて継続と期待への声を多数いただきました。

これまでのJIAと会員の皆様のご支援に感謝し、今後の変わらないご支援をお願いいたします。

——私たちは自問します。“わたしは何を残しただろう。”

建築家資格制度の歴史

—JIAの根幹、受け継ぐ初心—



近藤 昇
本部建築家資格
制度実務委員会
委員長



安達治雄
職能・資格制度
委員会 委員長



内野輝明
職能・資格制度
委員会 委員

建築家資格制度はJIA本来の活動基軸の一つ

(旧)日本建築家協会(JAA：国際建築家連合(UIA)加盟のために前身団体から1956年に改組)と、専業設計事務所の団体だった日本建築設計監理協会連合会とは、1987年に合体して新日本建築家協会(JIA)となった。UIA加盟はJIAが引き継ぎ、名称も96年に「新」を外して今日に至っている。

JIAへの二者合体設立の趣旨は2つ。

- ①我が国の建築家を糾合・代表し、内外からの信頼に応え得る一つの大きな組織が必要
- ②建築家の職能への社会からの要請に応え得る、国際的基準に合った体制の確立が必要

これを実現すべく当初15,000名の会員を目指し、設立総会時には7,500名ほどを記録した。設立趣旨に沿い、「会員を増やし発言力をつけ**建築家職能のための法体系整備を進める**」「将来、国際的な職能基準による**建築家資格制度をつくる**」という目標がJIAの活動基軸となった。

建築家は職能資格、建築士は技術者資格

JIAが建築家資格制度(登録建築家)を設けた背景には、日本には建築家の職能を規定する法体系がなく、建築士という技術者資格しかないという現実がある。建築士法の第1条には「建築物の設計、工事監理等を行う**技術者の資格**を定めて、その業務の適正をはかり、もって建築物の質の向上に寄与させることを目的とする」とあり、その技術者資格自体も一級・二級・木造に分けられ、姉歯事件を受けて構造設計一級、設備設計一級も加わるなど、技術面で細分化されている。他国のような、依頼者や社会への責務をも規定した職能資格ではなく、国際的な互換性に乏しいものといえる。

職能資格の規範例を挙げれば、全米建築家登録委員会評議会(NCARB)では、「建築家の職能を通じて公共の健康、安全および福祉を守ること」をもとに資格認定基準を作っている。また、「建築家の業務における国際的職能規範の勧告に関するUIA協定(UIAアコード)」では、「公共の健康、安全、福祉、文化に資するために」と職能の

目標を掲げるとともに“建築家という職域のメンバーは能力・誠実性・職能意識を高い水準に保つことに専心し、そしてそのことによって、建築・都市環境と公共の福祉と文化の持続可能な発展に不可欠な、建築家に特有の技量や素質を社会にもたらす”と謳っている。

つまり建築家の職能は、これを統制する資格制度において、公益保護と公益寄与を基軸に、個人の技術能力だけでなく、個人に帰属すべき業務倫理と責任が規定される。このように「建築家」という職能資格は、技術者資格の内容を包摂しつつも、これとは本質的な相違がある。

欧米の資格制度を調査(1990年～)

国際的に通用する建築家の制度と立場を日本で確立しようと、JIAは1990年に調査委員会(林昌二会長・椎名政夫委員長)を立ち上げ、1991年に6名ほどで欧米の資格制度を調査した。欧州調査班の一つがたまたま訪れたオランダ建築家協会ではECの建築家指令(1985年)を見せられ、そこには建築家の資格・業務・職能を教育と一体にとらえる制度の骨格が書かれていた。1994年、JIAの制度案はこのEC指令をもとに考えられ、教育・実務訓練・資格認定・生涯研修の四本柱として、それぞれに第三者性を持つ機関による評価認定システムを設ける形となった。

建築家資格制度の素案を検討(1992～96年)

1992年、調査委員会に代わり建築家資格制度検討委員会(椎名政夫委員長)が設置された。当時の鬼頭梓会長は総会で「消費者の立場を第一とし、世界に通用する職業としての建築家資格制度の確立を目指す」と述べ、これはその後、一貫してJIAが求める資格制度の目標となった。

検討委員会はEC指令や米英・日本の大学カリキュラムを踏まえ、1993年に建築家として必要な履修項目を整理して公表。その後も実務訓練の項目や継続職能研修CPDについても検討し、建築教育から実務訓練、資格試験、継続職能研修にいたる四段階の資格制度の全体システムをまとめたのは前述のとおり。

1996年、検討委員会に代えて建築家資格制度推進会議を設けて資格制度の具体的検討に入り、「四段階」の内容を煮詰めるとともに、現に建築家として活動している人々についての「経過措置」を検討し、「資格制度に関する四会協議会」にJIAの「建築家資格制度素案」として提出した。「素案」としたのは、JIA内部に加え関係団体との討議を経て普遍性を得ようという姿勢を表わしている。

国際化に対応する資格制度試案を「調査会」に提示

UIAアコードの採択やAPECアーキテクト・プロジェクトなどから、国際化への対応が重要とみた建設省も参加して、建築技術教育普及センターに「建築設計資格制度調査会」が2000年に設置された。2001年の調査会にJIAが提案したのが、「国際化に対応するための建築設計資格制度」案で、将来のあるべき建築家資格制度だけでなく、それに至る当面の経過措置を明示した点で一步踏み込んだ内容であった。検討の前提にJIAが主張したのは、

- ①新しく作られる資格制度は資格の本来の意義である「消費者保護のための設計者の能力証明としての機能」を果たすものであること、
- ②将来の建築家資格制度を明確に設定した上で、現状からのスムーズな移行や目前に迫ったAPECアーキテクトへの対応を考えるべきであること、
- ③UIA基準に適合し国際的な相互認証に対応しうる資格制度が即、日本の建築家資格制度であるべきで、国内資格と国際資格の間にレベル差があってはならない、の3点であった。

ただし、経過措置を画く中で、「能力証明」が技術面だけのようにより外部から理解された可能性は否めない。

建築家資格制度（登録建築家）スタート（2003年度）

この間、静岡地域会や近畿支部で独自の建築家制度の試行があり、後者では建築家データベースまで作ったが、これらが後押しする形で、JIA本部としての建築家資格制度が実際に2003年度末から運用開始された。

UIA基準に照らして、建築士法に足りない素養・能力・認識・職能観を実務訓練によって習得した者が、登録建築家として認定・登録される、という骨子の制度である。

まずは実務訓練の監督者としての指導建築家を作るために、JIA会員限定の実績認定により、初年度末時点で1,061名、3年後の初回更新直前には2,501名の登録を見た。

2008年度からのオープン化への取り組みで、2009年にはJIA会員外でも要件を満たせば認定されることになったが、認定登録機関の第三者化は果たせず、JIA内部に置かれたままとなっている。その後、更新時に

CPD等の要件を満たせないケースが増え、JIA会員数の減少も加わって2015年の制度改革までは登録者数は漸減傾向を示した。

国家資格制定への2つの道

建築士会連合会の専攻建築士制度内の統括設計専攻建築士と、JIAが準備中だった登録建築家とを同等性のあるものとして整備し、長期的には統合していこうという二会合意が2002年に結ばれたが、両会ともに内部の事情等により、ただちにその先に進むことは難しい状況にある。この2つの制度を他団体の意向にも留意しつつ社会制度として成熟・統合させ、未来のUIA基準の国家資格への移行の準備をする流れを「社会制度経由ルート」と称する。

他方、「JIA正会員の全てがUIA基準の求める建築家のありようを示す登録建築家となる」という状態を実現する努力を通じて、UIAの窓口であるJIAが独自にも建築家の国家資格制定への環境を整える道を模索しようと、新たに芦原太郎会長（当時）から「正会員ルート」が2012年に提示され、このルートの実現方法の検討が翌年から始まった。

建築家資格制度の今後（正会員ルートを中心に）

公益社団法人であるJIAには、公益性を担保する社会的責任がある。その責任を果たすには、会員の資質（クオリティ）を確保することが必要である。JIAはUIA加盟の建築家集団であり、その正会員は全員が建築家の客観的要件すなわちUIA基準を満たす責務がある。職能団体の社員資格（membership）は建築家の職能資格（license）とは「資格」の意味が異なり、UIA基準の代用にならないがゆえ、原則として正会員の全員がUIA基準に則る登録建築家となる必要がある、と結論付けられた。

2015年6月の通常総会において、そのようにJIAの会員規定が改定されて正会員が登録建築家になることが原則化され、建築家資格制度の規則細則等も改正された。UIA基準の根拠文書をあらためて明確に規定し、登録建築家は後進の者を登録建築家へと育成する努力義務があることを明文化、CPDについては他団体の制度との互換性を確保したことなどが「制度改革」の要点である。

2015、2016年度と優遇措置募集を行った結果、2,100名を超える方が登録建築家となり、現在、JIA正会員のうち対象者の57%が登録建築家である。

建築家資格制度を将来日本に根付かせることは、ここで見えてきたように、JIAがその前身時代から半世紀以上にわたり目途としてきたことであり、そのためには、一人でも多くの登録建築家が生まれることが、不可欠である。

上海の残照

—老街が創る新しい空間価値—



安部 貞司

久し振りに上海に行きました。2002年頃は月の半分は上海に滞在する生活をしていました。当時と比べ、街の猥雑さは変わりませんが、街中に増えた横断地下道にはエスカレーターが設置され、スクランブル横断する人は少なくなりました。商店や露店でも^{ウィーチャットペイ}微信支付や^{アリペイ}支付宝などの電子決済機能アプリで簡単に支払いができ、街で現金を使うことはほとんどありません。消費志向も実用的でシンプルな「MUJI」や「UNIQLO」を好み、ネット通販(越境EC)で世界中の商品を購入する。中国人(特に都市人民)の生活様式や価値観は変化していました。

■ 30年を経た中国

私が初めて中国に出張した1980年代は、国交回復(1972)後で日中平和友好条約(1978)の締結、その後の天皇陛下の初訪中(1992)など、中国と日本の雪解けムードが高まり、政治・経済も大きく変動していた。南方政策で沿岸都市が順次開放され、私は経済特区となった深圳や海南島・華南地域に、その後は中国各地に出掛ける機会があった。当時の街は、昔の日本にタイムスリップしたような感じであった。

^{とうしやうへい}鄧小平氏の改革・開放政策(1978)に移行して30年以上が経過した。その間に天安門事件(1989)、1997年7月1日に香港が返還され一国二制度がスタートし、1999年12月1日にはマカオも返還された。90年代に市場化改革と対外開放が加速して、貧困国だった中国は経済規模で日本を追い越し、今や世界第2の経済大国となり世界経済を牽引している。社会主義を標榜した中国発展で最も資本主義的な都市が存在する。中国発の文化やルール、中華的なチャイナスタンダードが世界にあふれて存在感を高めている。2013年には習近平国家主席が現代版シルクロード「一带一路」を提唱し、中国と欧州を結ぶ陸と海の2つのルートの沿線国で巨大経済圏構築を目指している。

平均分配の考えと平均主義によって商感覚を封じ込め、国をあげて革命に燃えた人々が、めまぐるしく変わる政治情勢に振り回されながらも自由な発想が強い世界に変

わった。高度経済成長のエネルギーで猛進し、都市部の過熱気味の不動産投資で大規模な開発が次々と行われ、高層ビル群の大都市へ変貌してきた。一方で、現在の安定と喪失感の中で、中国政府は経済成長率を求める時代から成長の質を追求する方針を打ち出した。

■ 上海の深層構造、空間の中華文化

上海は「海」と字にあるが、海より川の文化の街である。上海はかつて海だったところに長江(揚子江)の土砂が堆積し陸地となった。外洋に近く船舶が接岸でき、^{ホワンブージャン}内陸との物資の集積地として、長江の支流の黄浦江と下流の江南地方は水路を軸に水の文化で栄えてきた。上海は150年程度の歴史しかないが(日本は今年明治維新から150年)、他の都市とは異なる軌跡で世界有数の国際都市になった。1840年のアヘン戦争、1842年の開港(南京条約)で、イギリス、フランスが租界経営を始め、「東洋のパリ」といわれるヨーロッパ風の街並みが生まれた。寒村に過ぎなかった上海に、イギリス人がインドの酷暑をしのぐために考案したベランダのあるコロニアル様式の建物を建て、東アジア貿易や金融の中心地として発展した。その後、^{ワイタン}外灘にバロック様式、アールデコ様式と、異なる時代の西洋建築が建てられた。

1980年代まで上海一高いビルは、人民広場(旧競馬場跡)に面して南京西路に建っているアールデコ様式の22階建ての国際飯店(パークホテル)だった。私が泊まった部屋から見ると、^{リロン}「里弄」と呼ばれる長屋式住宅が上海の街を埋め尽くしていた。上海の旧租界地にはこの「里弄」(「里」「坊」と呼ばれる住宅街区が多く建設され、代表的な街区構造となっている。1842年にイギリスの租借が開始、低湿地を急速に開発する手法で1860年代から20世紀前半に建てられた建築様式で、租界時代に大量にやってきた人々のために伝統的な中国の住宅様式とイギリスの労働者住宅を改良して「華洋折衷」でつくった都心居住の共同住宅である。当時は画期的な近代住宅のモデルとして注目された。ゲートを構えたスタイルが特徴で、内部へ通じる黒塗りの両開き扉^{シークローメン}「石庫門」が設けられ、



莫干山路 (モーガンシャンルー) 50号



1933老場坊 (イージウサンサン・ラオチャンファン)



田子坊 (ティエンツファン)

その内部は棟割り長屋であり、長屋の間は路地になっている。大規模な「里弄」には名称がついている。街区は商都上海の経済の縮図でもある。近年の加速する都市建設で次々と取り壊され、多くが失われたが、残っている街区、建築物、路などの都市要素から、覆い隠された上海の深層構造や人間の生きた匂いを感じることができる。

■消える雑多な路地・広がる経済合理性の風景

高層ビルが林立する上海で、消える里弄や石庫門建築の文化遺産としての価値が見直されている。2010年代になって、1930年代築の石庫門住宅群をホテル、レジデンス、店舗にリノベーションして、旧フランス租界の住宅街の雰囲気・風情を残した洗練されたエリアが生まれている。歴史的建造物を保存して再開発する事業も本格化して、街づくりに一石を投じて街の魅力を見直す契機となっている。上海の街並み保存や建築群保存事業は文化財保存よりも地域振興としての性格が強い。常識外の大膽なりノベーションによって魅力的な場所につくり変え、重要な観光資源になっている。器をつくるだけでなく、その後のソフトの上手さがある。

◆莫干山路 (モーガンシャンルー) 50号

上海で古い建物を再生した先駆けのひとつ。蘇州河のほとりの莫干山路に囲まれた地帯にある操業停止の紡績工場や倉庫群を芸術家がアトリエやギャラリーとして利用。昔ながらの運河沿いの街並みが、現代アートを発信するギャラリー街に再生された。

◆1933老場坊 (イージウサンサン・ラオチャンファン)

旧日本租界があった虹口地区の、廃業して放置されていた1930年代の食肉加工場を、ギャラリーやレストランが入る迷宮のような商業施設にコンバージョン。2008年に「1933老場坊」としてオープンした。

◆新天地 (シンティエンディー)

旧フランス租界地に建つ1870年代の建物群を、レストランやバー、ブランドショップ、シネマコンプレックスなどの複合商業地区に整備し、上海「新天地」として2002年にオープンした。今までの中国にはない、新

た空間価値で古い建物を蘇らせた成功事例が引き金となって、保存再生プロジェクトがブームとなった。

◆田子坊 (ティエンツファン)

泰康路に面する3万㎡の敷地 (里弄) に個性的な店やレストラン、カフェが並び、若手芸術家のアトリエやギャラリーが集まるエリア。クリエイターの拠点となり、上海のSOHOとも呼ばれるお洒落なエリアに変わった。まだ長屋で暮らす住人もいて日常生活も共存している。

■香港のようにしたい時代から

1992年に大連の超高層コンプレックスビルの国際コンペに参加した。その要項に“中国的でなく、超々近代的ビルのデザインを提案する”とあった。その頃は中国のどこに行っても、北の香港、南の香港を建設すると熱っぽく語っていた。経済の繁栄だけを軸に突進する中国は、近代化社会が落とした課題が懸念され、25年前のプレゼンテーションのテーマは「about文化と現代都市」とした。

黄浦江をはさんで浦東の未来都市と外滩 (別名バンド) の、合わせ鏡のような都市光景は上海の都市イメージを形成している。香港を目指して近未来的な高層ビルが林立する多様な建築模様の第一段階、民族主義の第二段階、中国的感性、歴史の継承が見直された第三段階。世界最大の国土面積と約14億人の人口を抱える中国、今や、超少子高齢化社会に直面している社会構造の中で、上海市はどのような成熟都市を示すのか。



黄浦江をはさんで浦東の高層ビル群と外滩

池田昌弘氏に聞く 構造家とはじめから一緒に考えると 建築はもっと自然になる

今回お話をうかがうのは、構造家の池田昌弘さん。国内のみならず、海外でのプロジェクトも多数手掛けており、建築家と連名で発表された作品も数多くあります。構造設計を担当された作品は、大きな建物だけでなく、意識的に小さな住宅もたくさん手掛けておられるそうです。どのようなことを意識して設計されているのか、普段から大切に考えていることをお話しいただきました。



— どの時点から構造家を目指しましたか。

子どもの頃から絵を描くのが好きで、将来は建築家になりたいと思っていました。名古屋大学の建築学科に入り、最初の3年間くらいは製図室に入り浸っていて、構造に進むことを意識していませんでしたが、自分で建物をつくるなら、例えばシェルだったら厚みを自分で決められる人になりたいなと思っていました。しかし意匠設計者でそこまで自分で決めている人はいなかったので、自分で決めてみたいと思い、曲面構造を研究している松岡理^{おさむ}先生の研究室に入りました。研究室で先生に「どんな形のものも自分でつくれるようになりたい」と伝えたら、三次元シェル理論の外国の文献を渡され、英語を読みながら数式を延々と解くという学生生活を送りました。

大学院修了後、松岡先生と、松岡研究室の先輩の佐々木睦朗さんに推薦していただき、木村俊彦構造設計事務所に入りました。

— これまでにどんなプロジェクトに関わってこられたのでしょうか。

最初に担当したのは超高層の「梅田スカイビル」でした。当時はまだGUIがしっかり確立されていない時代だったので、自分でコンピューター言語で直接入力して解析をしていました。そのあと佐々木さんの事務所、齋藤裕さんや難波和彦さんとの戸建住宅や、伊東豊雄さ

ん、妹島和世さん、西沢立衛さんとの公共建築など、たくさん経験させてもらいました。独立後も佐々木さんの仕事を継続していて、「せんだいメディアテーク」などの構造設計を一緒にやらせてもらいました。その後も、海外のプロジェクトなどに携わる一方で、遠藤政樹さん、手塚貴晴さん・由比さんなどとも協働してきました。

最近は大変尊敬している構造家の播繁さんとのプロジェクトに関わる機会があり、無印良品の家などで広く使われているSE構法を用いた木造の戸建住宅を設計・供給している会社(エヌ・シー・エヌ)に、新世代のSE構法へのコンサルタントとして参加させてもらっています。昨年、播さんは他界されてしまいましたが、プロジェクトは今も現在進行形で、藤原徹平さんなどと一緒に設計を行っています。それだけではなく、世の中に普通にある建物の中にも、大切なことがあると思い、そういう社会性のあるものにできるだけ携わるようにしています。

— 構造はどうやって決めているのですか。

構造設計者、とくに構造家と呼ばれる人たちが日本でもっと育ってほしいという思いがありました。そのためには、まず設計のプロセスを変えることが大事だと思います。積極的に設計初期段階から関わる。それだけのことで、同じ人が関わっても随分違う結果になるのではないかと。それを僕自身が実践し、作品を発表する時は連名にしてみようと思いました。

多くの建築家は意匠がある程度決まったところで構造設計を依頼していると思いますが、僕はもう少し前の段階で参加するようにお願いしています。ですから、建築家からヒアリングをするというよりも、プロジェクトの中で自然に決まっていく感じです。今までつくってきた建物でも、全部1から10まで僕ひとりでつくったものではなく、すべて建築家や施主とのコラボレーションの中からいつの間にか生まれてきているような気がします。

その時、僕は構造だけを考えようと思って打ち合わせに参加しているわけではないんです。それよりも、このプロジェクトは本当は何がテーマなのか、何を大事にし



「せんだいメディアテーク」チューブの接合部 黒がプレート、白がチューブ



「二階堂の家」外観 前にぶら下がっているのは階段室



「二階堂の家」の模型 色の濃い部分はSE構法、その他の部分は在来工法

ようとしているのか、それによってどういうことを起こそうとしているのかなどを構造という切り口で関わっています。

設計に関わるメンバー全員が、それぞれの切り口でプロジェクトを考えられる状況を大切にしています。

僕は特許のような新しい構造形式を作り上げることよりも、既成概念にとらわれなくて、自由に発想して構造と建築を融合させていくことのほうが素敵なことのような気がします。例えばコンクリートひとつをとってみても、柱・梁なのか、壁・スラブなのか、というような形式にはとらわれなくて原点に戻ること、すべて鉄筋とコンクリートでできているだけだと思えることのほうが、本質的な気がします。

——構造家の皆さんは、意匠設計者よりも空間を立体的に捉えることが早くできるように思います。

というより、三次元的な感覚を身につけるにはやはり習慣が必要なのではないでしょうか。僕自身、平面や立面で考えるのではなく、立体の空間の中を歩くように図面を見るように習慣づけてきました。

現在はコンピューターで構造計算をすることが構造設計だと思っている人も多いと思いますが、図面を見ながら空間を捉える習慣を忘れてはいけないのではないのでしょうか。僕は、最初に解析プログラム自体を自分で作成するところから始めることができたので、今はさまざまな構造解析ソフトの中で行われていることを、手計算の数式やプログラムの中身を理解しながら設計をすることができるようになりました。

——意匠設計をしてみようと思ったことはないのでしょうか。

これまでにも意匠設計を依頼されることもありましたが、その場合は、建築家を紹介してコラボレーションす

るようにしています。そのほうが設計の可能性が広がりますし、ひとりで全部やるというより、それぞれの知識や才能を持っている人たちと一緒に進めていくほうがいいものができると思っています。その時に大切なことは、繰り返しになりますが、施主、建築家、構造家、設備設計者、施工者などがバラバラに考えるのではなく、うまくオーバーラップしながらひとつのものをつくっていくことだと思っています。そして、その時にどんな自分であれば、そのプロジェクトの中で貢献できるのか。そんなことを試行錯誤しながら毎日頑張っています。

——海外でも仕事をされているようですが。

いろいろな国がありますから、一概に日本とその他の国という見方はできないのですが、一般的には日本では建築家と構造家と一緒に設計をしていくというスタンスですよね。ところが、海外ではクライアントが建築家、構造家それぞれと別々に契約しています。つまり、構造家は建築家のデザインに対しての、クライアントのコンサルタントになるというスタンスなのでしょうか。

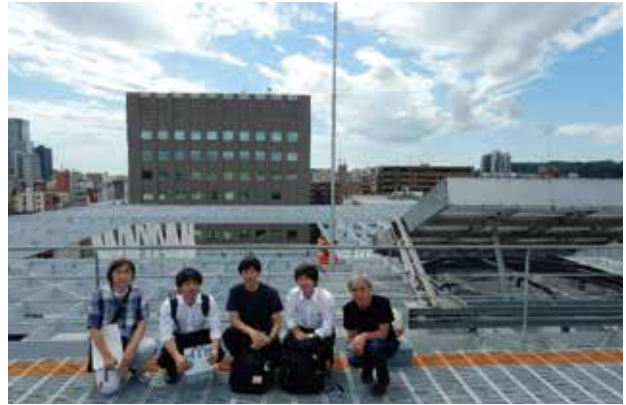
僕が日本の建築家と海外で仕事をする時は、その建築家と一緒にクライアントの元に打ち合わせに行くのですが、向こうからしてみると、なぜ建築家を構造家がサポートしているのだらうと思っているのかもしれない。

国ごとにレギュレーションも違えば、手に入りやすい材料も全然違うので、僕は海外で仕事をする場合、必ず、その国のトップの構造家に協働をお願いするようにしています。

日本の建築家が海外で仕事をする時、現地で実施設計から現場監理まで通してすることができず、実施設計以降は現地の人たちに頼りてしまっているケースもあります。そのプロセスに最後まで一貫して携わることができるようにするだけで、海外に建てる建物を日本で建てるように繊細につくれるのではないかと考えています。



イリヤ&エミリア・カバコフによる「落ちてきた空」



「せんだいメディアテーク」の屋上で、学生たちと交流

—これまで難しかったプロジェクトなどはありますか。

エンジニアリングが難しいというよりも、社会状況など全部含めて、チームのメンバー全員の意図がどうやったら自然にひとつにまとまるのだろうかを考えることのほうが、僕にとっては難しいですし、楽しいですね。

木村俊彦先生の事務所に入る時に先生に、「この種はどんな花が咲くのかわからないけれど、どんな花を咲かせるのかは池田くん次第だから、どんなものでも大事に育てていくことが大事なんだよ」とか、「富士山は遠くから見るときれいだけれど、近くに行くとゴミがあったり、岩がゴロゴロしていて決して美しいだけのものではないんだよ」とか言われたことを思い出します。その言葉があるから、これまでいくつもの難関にもポジティブに向かっていくことができているんだと、改めて初心に帰る気持ちです。

—日本は地震が多く、台風などの災害もあって法規が厳しいです。もしそれがなかったとしたら、日本の建物は変わるといいますか。

少し前に、茨城で開催された「茨城県北芸術祭」で、ロシアのイリヤ&エミリア・カバコフさんという芸術家の作品を設計しました。それは、砂浜に11メートル角の絵を突き刺したもので、2ヵ月間展示しました。この期間中に本当に地震も台風も津波も来たのですが、壊れることなく大丈夫でした(笑)。この時には法規というものはありません。つまり、本当にやらなくてはいけないのは、法規に関係なく、自然現象に対して大丈夫だと言い切れる建物や構築物をつくることなのかなと思います。

—今とくに注力していることを教えてください。

木村俊彦先生や佐々木睦朗さんの下で学んだことを、下の世代に伝えていくことにも責任を感じています。実際、アトリエの構造設計事務所の門を叩く人はすごく限られているので、その人たちに伝えるだけでは十分では

ないのかもしれないと考えました。また、もうひとつは、海外にはAAスクールなどいろいろなプライベートスクールがありますが、構造のスクールはありません。そういうものがそれこそ日本にあってもいいなと漠然と思っていました。そこで、2009年に Masahiro Ikeda School of Architecture (MISA) を設立しています。

そして今、大学の先生と一緒に研究を始めています。その研究を元に、建築をつくることをマクロに見て、いろいろなばらつきや信頼性を読み込めるような解析手法を考えていこうと思っています。そのことで、設計プロセスやできあがるものに変化が起こっていくことが楽しみです。

—最後に、建築家にメッセージをいただけますか。

建築家にとって構造はなんとなくブラックボックスになってしまっていますが、あまり固定観念に縛られずにいろいろな可能性があると思ってもらえればと思います。そして、できるだけ初期段階から構造家が設計に参加できる機会を増やしてもらえればと思います。

—貴重なお話をいただき、ありがとうございました。

写真提供：Masahiro Ikeda

インタビュー：2018年8月9日 JIA館5階応接室
聞き手：中山 薫・有泉絵美(『Bulletin』編集WG)

PROFILE

池田 昌弘 (いけだ まさひろ)

構道家 MASAHIRO IKEDA co., ltd

1964年静岡県生まれ。1989年名古屋大学大学院修士課程修了。
1989～1994年 木村俊彦構造設計事務所など勤務。1994年 池田昌弘建築研究所/mias設立。2004年 MASAHIRO IKEDA co., ltd設立。
2009年 Masahiro Ikeda School of Architecture (MISA) 共同設立。
2017年 Natural Sense共同設立。
2000年「ナチュラルシェルター」(遠藤政樹氏と共同)で第16回吉岡賞受賞。2001年「有田陶芸倶楽部」で松井源吾賞受賞。2002年「屋根の家」(手塚建築研究所)でJIA新人賞、第18回吉岡賞受賞ほか受賞多数。

都市と街の中で写真を撮る・こと

今号から4回にわたり、建築家写真倶楽部の皆さんにご協力をいただきながら「写真」「建築写真」について連載します。



建築家写真倶楽部
部会長
兼松紘一郎

都市も街も建築で埋まっている。そこには人がいる。

都市を、街を撮るということは、そこに建つ「建築」を撮ることと同時に、そこで生活をしている「人を撮る」ということでもある。

“人を撮る”それはその人の「生きること」へ目を向けることにもなる。言うまでもなく“撮る”とは、「写真を撮る」ということだとあえて付記しておく。

僕はこの6年間、建築家(像)を撮り、その建築家の建てた(設計をしたと記した方がいだろうか!)建築を、クライアントの理解を得て拝見し、写真を撮らせていただいた。そして、『建築ジャーナル』誌(月刊)に「建築家模様」と題して、撮らせていただいた建築家のプロフィールの写真を1面に、2面には撮った建築の写真とともに、拝見した建築と建築家の姿を、僕の視点での文章にして掲載してきた。

登場いただいた建築家はすでに70人になった。

そしてつい先日、山梨県甲州市の塩山に赴き、71人目になる建築家 網野隆明氏をいつものようにヒヤリング、建てた建築(主として住宅)を拝見し、その建築の主(所有者)にもさまざまなお話をお聞きしてきた。その一軒、室内をも拝見、クライアント(この家の主・奥さま)のお話によると、ご主人は数年前に逝去されたとのこと。思わず瞑目し、案内してくれた網野氏とともにお仏壇にお線香をささげた。その後、奥様と談笑して、そこに住んでいる謂われなどをお聞きし、写真を撮らせていただいた。

その後、近くにある、この山地の小川に沿った地に赴き、彼の改修設計による水車とその小屋を拝見。その後、(文筆家ではなく建築家としての僕と)設計をしたその建築家と軽く一杯をやりながら建築談議をするという、いつものように至福の時を過ごすことにもなった。

思い起すと、彼が水車の背後にある“水車小屋”だけでなく水車も設計したのだと聞き、そうだったのか!と改めて驚く。そして、そんなことできるの?!と思わず野暮な一言を呈してしまった。この水車と小屋は、甲州市の指定文化財・有形民俗文化財となっている。

彼とはJIAの関東甲信越支部に僕の主導によって「建築保存問題委員会」を構築した時からの付き合いである。さらにこの「建築家写真倶楽部」の創設にも関与したとの一言に、そうだった!と溜息が出る。さらに数年前に、この地の近くに知人の山荘(町家)を一旦解体して(復元・改修)移築を手掛けたことのある僕は、そこでも彼に相談に乗ってもらうなど、いつの頃からか盟友となったことをふと思う。

建築家写真倶楽部のこと

それはともかくJIAの中で唯一関東甲信越支部に存在する「建築家写真倶楽部」に触れなくてはならない。

故あって、本会は写真家 村井修氏(2016年に88歳で逝去)との出会いに端を発して構築したことを付記しておく。本会創設時に建築家写真倶楽部のイベントとして村井さん(親しみを込めてさんと記す)に講演をしていただき、その後壇上で村井さんを囲んで写真談議を行った。振り返ると、このJIAでの部会が、僕の“生きること”の根幹に鎮座しているのではないかと思ったりもする。

時は過ぎゆき、喜寿を経た僕は「時」を考える(いや、感じる)こと多々あり!「時とは何ぞや!」。辞書を捲ると、「過去から現在へ、さらに未来へと転属してとどまることなく過ぎ行く現象」とある。現象!やはり若き世代にも本会に参画してほしいが、我ロートルもうひと踏ん張りしてみようか!



塩山の水車と水車小屋

白樺湖夏の家

設計：武藤 章

長野県茅野市 1968年竣工

長野地域会「JIA長野県クラブ」が夏のセミナーとして工学院大学の旧学寮「白樺湖夏の家」の見学会を実施しました。その様子を「建物見学ツアー」として、当日建物を案内して下さった、工学院大学教授の鈴木敏彦氏に紹介していただきました。



1期工事の姿に減築した外観写真

(撮影：齋藤さだむ)

7月21日(土)にJIA長野県クラブの夏のセミナーを「白樺湖夏の家」にて開催し、26名の参加者にお集まりいただいた。内訳は正会員19名、準会員1名、法人協力会員2名、一般(所員、事務局)4名である。

「白樺湖夏の家」とは、工学院大学で教鞭を執っていた教授の武藤章先生が1968年に設計した「工学院大学白樺湖学寮」が元になっている。1968年以来、工学院大学の宿泊施設として学生や教員が夏場のキャンプや冬場のスキーの拠点として利用してきたが、2016年に大学が施設の閉鎖と解体の方針を示した。これに対して同窓生ほか有志が「建築を保存する会」を組織して保存を訴えたところ、最終的に学校法人工学院大学から工学院大学校友会建築系同窓会に譲渡することで解体を免れた。そのままの大きさでは維持費用がかさむため、2期および3期工事部分を解体、減築して原型に戻して、代わりにシャワー室と便所を増設し、キッチンを改修し、家具類を刷新した。

そして武藤先生が設計した北欧的な空間にマッチするように、家具と照明を1960年代のアルテックのビンテージを中心に選定し構成した。アルヴァ・アールトとアイノ・アールトがデザインした椅子やテーブルと照明器具に加え、アイノ・アールトがデザインしたイッタラのガラスと、カイ・フランクがデザインしたテーブルウェアも新たに揃えた。



白樺湖学寮から白樺湖夏の家への減築の図

武藤先生は1961年から1962年にフィンランドのヘルシンキでアールト事務所に勤め、アルヴァ・アールトに薫陶を受けた唯一の日本人である。ご本人はその影響を直接口にはしなかったが、先に解体された「工学院大学八王子図書館」にもスカイライトやインテリア、そして敷地との関係に北欧の建築の影響が見て取れる。そこで、私たちはかつての学寮を「夏の家」として位置づけ、会員を対象に夏季のみの利用で運営することにした。

こうして減築と改修により「白樺湖夏の家」はモダンに生まれ変わり、動態保存の活用が始まった。管理運営は工学院大学建築系同窓会による。最初に「建築を保存する会」を作り、会員を募った。会員には鍵が与えられ、まるで自分の別荘のように利用することができる。企業会員は研修やイベントに利用することもできる。

2017年は寄付をいただいた会員を中心に試験的に運用しつつ、北欧に造詣の深い講師を迎える集いを開催した。折しも2017年はフィンランド独立100周年だった。アールト研究の第一人者である多摩美術大学名誉教授の平山達^{すすむ}先生や、北欧のビンテージ家具を買い付けている山口太郎氏の講演会、そしてこの建築を設計した武藤先生の33回忌をご家族やご友人とともに開催した。暖炉に火をともし、アールトの家具に囲まれながら北欧料理を楽しんでいると、さながら白樺湖が北欧に思えてくるから不思議である。

私は、毎回研究室の学生を20名ほど連れていき、夏の家^{すすむ}の管理をともに学んだ。この規模のサマーハウスを



減築前の白樺湖学寮の外観写真

(撮影：齋藤さだむ)

使いこなすには、毎回トイレからキッチンまでを使いこなし、風を通し、掃除をすることが肝要である。こうして5月の開館では通水と大掃除を行い、夏季の使用を経て、10月に水抜き作業と掃除を行い閉館するという仕組みが出来上がった。泊まるたびに近くの温泉「すずらの湯」にも皆で足を運んだり、スウェーデン料理のレストラン「ガムラスタン」もランチやケータリングに利用させていただいている。週末を中心に、白樺湖の暮らしが始まった。

今回のセミナーでは、初めに私から以上のような建築の概要を説明した。次に、工学院大学名誉教授の南迫哲也先生から当時の武藤先生の設計手法についてご講義いただいた。南迫先生は1968年に1期工事の設計を協働し、1971年に2期工事以降の増築の設計を担当された。

「武藤章はセクションの建築である」「この天井の勾配を決定するのに随分苦心されていた」「この勾配は、2階の廊下の手すりから見下ろすとそのまま白樺湖の湖面に向かってるのがわかるだろう」「図面を描き終えると武藤先生は必ず椅子の上に上がり、目を細めながら朦朧とした景色として図面全体のバランスを確認するのが常だった」等々。インテリアの各部を指差しながら、この建築を設計する武藤先生の姿を間近で見ていた南迫先生の臨場感あふれるお話に、私も含めて皆が引き込まれた。

その後、興奮も冷めやらず、皆が自由に内部を見学し、寸法を測ったり、南迫先生に質問したりしてあっという間の2時間であった。最後に外で記念撮影をしてこの建築との別れを惜しみながら、皆様は次の訪問地に向かった。「この建築を残すことができて本当に良かった」とのご感想を頂戴し、保存の甲斐を実感した1日だった。皆様に感謝申し上げる。

最後に、「白樺湖夏の家」は「第4回これからの建築賞2018」を受賞したことをご報告する。

「建築を保存する会」による「白樺湖夏の家」の活用と保存と継承の活動は、一般社団法人東京建築士会より、建築士としての多様な立場を通じて行った未来につなが



白樺湖夏の家の前で記念撮影



リビングから暖炉を望む内観写真

(撮影：齋藤さだむ)

る社会貢献として評価いただいた。工学院大学建築系同窓会では、引き続き北欧の植栽を中心とする外構工事や、サウナの建設を通じ、北欧の暮らしや文化を体験できる拠点として、白樺湖全体のまちづくりにも参画し、地域の活性化に貢献していきたい。

■建築データ

第1期工事 1968年11月竣工

主要用途：学寮

設計：工学院大学建築学科 大学施設委員会

意匠：武藤章、南迫哲也

構造：十代田昭二助

設備：中島康孝

施工：白石建設

第2期工事 1971年増築

第3期工事 1977年増築

第4期工事 2016年減築改修

主要用途：別荘(学寮から用途変更)

設計：工学院大学建築系同窓会/建築を保存する会

施工：株式会社ヤマウラ

敷地面積：約2,640㎡

建築面積：164.20㎡

延床面積：204.05㎡(1階 135.06㎡、2階 68.99㎡)

改修設計期間：2016年4月～6月

改修施工期間：2016年7月～10月

構造：鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造、木造

設備：給湯 小型電気温水器/暖房 暖炉

主な外部仕上げ：

RC打放し/鉄骨部 リプラス下地モルタル木ゴテ仕上VP/木造部 欧州松本実板下見板張り、煮亜麻仁油塗り/軒天井 白ラワンベニヤOS/屋根 亜鉛鉄板 平葺OP 鼻隠 鉄板OP/テラス 鉄骨製、床一部スキ入りモルタル目地切

主な内部仕上げ：

リビングルーム/床 ブナフローリングCL/壁 コンクリート打放しリプラスモルタル木ゴテVP、一部白ラワンベニヤ/天井 白ラワンベニヤOS 梁下漆喰

工学院大学建築学部教授
建築系同窓会会長
北欧建築・デザイン協会副会長
鈴木敏彦



コンペ／時代／夢



今村雅樹

建築事務所を始めてすぐに、昭和から「平成」へと移った。社会に出て10年目のことである。当時は毎年のように公開コンペがあり、なかなか1等が取れなくて2等・3等が続き悶々としていた時に、やっと初めて1等が取れ「公共建築(地域センター)」が設計できた。

それまでは、インテリア・家具や店舗や住宅の設計が中心だったので、公共建築の設計スタンスもそれまでと全く変わらぬやり方で進めた。住宅のクライアントと話を詰めて説得しながら設計するやり方が、まさに当時初めての試行錯誤の「住民参加型の設計手法」に上手くフィットした。

公共建築は、住民の税金で建てられるのであるから使う住民側と話を詰めないといけないという自論で、デザインの責任はこちらにあるが、使い勝手やプログラムは住民参加の中で反映させたのが功を奏した。「時代」がそうさせたとも言えるかもしれない。バブルが崩壊して、これからの社会を考えていく時代に入った時だった。

それから、早30年ほど経ったが「コンペ」形式の設計者選定は姿を消し、「プロポーザル」が主流の時代になった。昔、恩師の近江榮先生が「それぞれの建築家のアトリエがコンペにかかる費用と時間たるや大変なもので頭が下がる」とおっしゃって、「これからはその負担を軽くするプロポーザルというやり方を考えているんだ」と話をされていたのを思い出す。果たして今ここにいらっしゃれば、このプロポーザルの現状を見て何と思われる

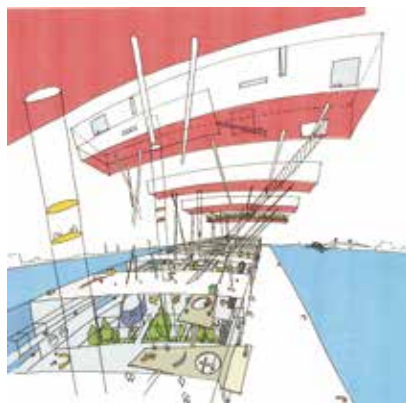
だろう。

おそらく今度は、若い建築家の登竜門だった「公開コンペ」の重要性を訴えられるのではないだろうか。

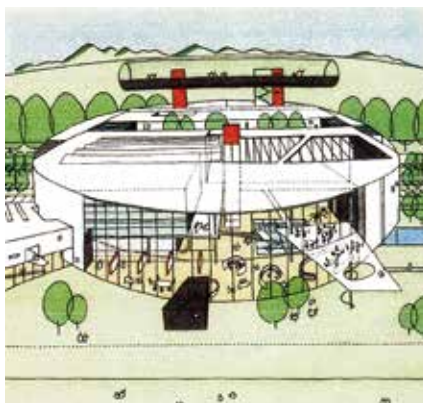
ここ数年、大学院で設計志望の学生たちを指導していると、今やほとんどが就職先に大手組織設計やスーパーゼネコンの設計を志望している。「就職のために大学院に行く」という考えが、我々の院生時代とは全く違う若者たちの捉え方である。大学院で「研究に没頭する」というよりは、学部5年・6年という感覚なのであろう。

「建築家」像も変わってきた。「建築家」という個人の作家としての可能性を表現できるという責任ある職業に憧れて、長崎の田舎から出てきた自分を考えると、現代の学生は何と現実を見過ぎていることか。「10年後の自分をイメージしてそこに向かいなさい」と学生によく話すのだが、そこには「10年後のリアルな夢」を持ちえないことに気づく。自分どころか、日本の10年後もわからないのに……と答えが返ってきそうだ。

それでも、青臭いかもしれないが、彼らが「夢」を語れる時代にしてあげたい。防災・環境・セキュリティなど、「設計」で考えなければいけないことが山ほど増えた。現場も手が足りない、職人もいないなど建設業界でも問題がたくさんある。その中で、未来の「建築家の夢」はどこにあるのか、「自分の夢」をどのように見つけ出すのか、夢のある「コンペ」の時代が再来できないものだろうか……と。



横浜港国際客船ターミナル コンペ3等案(1995年)



太田市休泊地域総合センター コンペ1等案(1996年)



大分県日田市文化施設 コンペ3等案(2003年)

抱負を語る

「温め続ける」こと 「進化する」こと

河内真菜



「私の卒業設計は〈境界の空間化〉をテーマにします」。今から20年以上前、大学の教授に常々温めてきたそのテーマを説明すると、「うーん、という？」と、とても広義で曖昧なその表現を、一緒に悩み言葉を探してくれました。今は亡き教授と考えたそのテーマを、今もものづくりの基盤としています。当時の私は、境界の空間化が直感的に「おもしろい」と感じるその先にあるものを模索し、立地別に100を超える建築をリサーチし、卒業デザインを仕上げました。

結果、「境界が空間化する」とは、分かりやすく言うと、縁側や広縁のような内外の「中間領域」や、都市と暮らしの「狭間」、風景や眺望への「抜け」、行為と行為の「間」などさまざまな居場所でした。壁ではない何か、「素材」や「空間」で形作られた境界は、自然と人を緩やかに繋げる機能や、五感を豊かにする居場所としてさまざまに展開されており、その形態も環境に応じて多岐にわたっていました。そして、歴代の建築家が巧みにそれを「カタチ」にする術をたどどしくも自分なりに解釈できた気持ちは、今も忘れることはできません。

私たちの仕事は、日々の行動や作業などのご要望や機能をカタチにすることですが、日常という行為の積み重ねからくる空間を機能的に解くと同時に、非日常という冒険や憩いをどうやって盛り込ませるかも大切だと感じています。そういった要素を、自分で温め続けているテーマをもとに、建築の形態として落とし込む術を、今後も修練し、挑戦し続けたいと思います。まだまだ描いた建築家像には程遠いですが、豊かな生き方の提案と実現を、先輩方に学びながら、未来の自分の設計活動に繋げていきたいと思っています。



稜線に配慮したファサードデザイン



光と風を導く花ブロック

抱負を語る

七徳堂の挑戦

綾井 新



東京大学本郷キャンパスに建つ七徳堂（1938年竣工）は、内田祥三の設計によるRC造、入母屋造本瓦葺きの武道場で、キャンパスの中心にある三四郎池の南の高台に配置されている。スクラッチタイル貼の擬ゴシック様式を基調とするキャンパスにおいて、鬱蒼とした大樹の間に顔を出すこの和風建築が別世界を生み出している。

七徳堂の改修を通して、築約80年の歴史的建築物に、挑戦に満ちた若々しさを感じた。その理由の一つとして、屋根の大型天窓（12.6m×1.45m）を挙げたい。この天窓は、武道場の入口にあるガラス天井に自然光を導くもので、本瓦葺の外観を乱さぬよう高欄の奥に隠されている。天窓は深い軒（軒の出3.3m）の下にあるため光は弱い、しかし夕刻には西日が天井をほんのり赤く染めて美しい。シーリング材の無い時代に、天窓からの漏水をいかに防ぐかは難題であっただろう。大型の天窓を実現したい、しかし雨漏りは避けねばならないという難題に挑戦し、ギリギリまで考え導き出した解決が、深い軒の奥に設けられた天窓だったのではなかろうか。埃が厚く積もり忘れ去られていた天窓に、改修によって光を取り戻すことができ嬉しい。この他にも、見事な反りをつくる曲面屋根スラブ、瓦を引っ掛けるために曲面スラブに施されたノコギリ型の凹凸、武道の衝撃を吸収するために900mm間隔で床下に仕込まれたコイルばね等、先人の創意に何度も唸る現場であった。

七徳堂には「無いものは考えてつくればよい」というものづくりの根本、若々しい挑戦が溢れている。歴史的建築物の改修は、時間を超えた対話だ。その対話は楽しく、これからつくる者を勇気づけてくれる。



七徳堂 西側外観

交流委員会 Cグループ

2018年交流委員会C、Dグループ
合同ゴルフコンペ

交流委員会
法人協力Cグループ
オイレス ECO
若澤一幸

7月21日(土)、例年以上に厳しい暑さの中、JIA関東甲信越支部交流委員会C、Dグループ合同のゴルフコンペが開催されました。会場は前年同様に千葉県野田市にあるクリアビューゴルフクラブ&ホテル。都心(箱崎IC)から車で約40分、つくばエクスプレス 柏の葉キャンパス駅からもクラブバスで約15分と非常にアクセスの良い、利根川のリバーサイドコースです。

当日は総勢26名の正会員、準会員と法人協会員が相互の情報交換並びに交流親睦を目的に参加し、OUT 4組、IN 3組に分かれて順次スタートしました。日頃の練習成果を発揮すべくみなさん奮闘されていましたが、強い日差しと30度を超す暑さに悩まされ、なかなか思うような結果が得られなれない方が多かったようです。それでも、終始楽しくプレーを満喫していただいていたように思います。

プレー終了後にはゴルフ場と併設されたホテルのレストランで懇親会が開かれました。長尾俊夫Dグループ長、河野剛陽交流委員長の挨拶に始まり、ニアピン賞、ドラコン賞、ブービー賞、順位賞などの各賞が発表され、見

事にベスグロで優勝された奥尉さんには拍手喝采の中、優勝スピーチをしていただきました。

なお、競技結果は次の通りです。

優 勝	奥 尉さん (日本設計)
準優勝	大山 俊司さん (リフォジュール)
第3位	杉山 成明さん (フッコー)

最後に藤沼傑支部長より閉会の挨拶をいただき、ゴルフコンペは無事に閉会を迎えました。開催に際し尽力いただいた幹事の杉山成明さん、秋山光和さんには改めてお礼申し上げます。

また、私がJIA法人協会の担当として出席させていただくようになって早くも4年が経過しました。若輩者にもかかわらずいつも暖かく迎えてくださっているCグループの皆様には、この場を借りて心より感謝申し上げます。

これからも弊社の製品や技術を通して、少しでも正会員の皆様のお役に立てれば幸いです。



プレー終了後の懇親会



藤沼傑支部長の閉会の挨拶

交流委員会 Eグループ

JIA 活動と
新しい時代への幕開け

交流委員会
法人協力Eグループ
代表幹事
きんでん
若佐明継

弊社はなかなか関東でお仕事をいただけなかった時代にも、協力会員としてJIAに入会させてもらい、いろいろな方々との交流やさまざまなご支援を頂戴し、現在では、多くのお客様からお仕事をいただけるようになりました。私自身もJIAの活動にお邪魔させてもらい、早7年目になり、交流委員会の法人協力Eグループの代表幹事も3年目になりました。

私たち電気業界では、電力の自由化やガスの自由化、さらに、東日本大震災以降の原子力発電・核燃料の問題、発電問題を補うための太陽光発電・風力発電やバイオ発電等の新エネルギー発電所の設置や新エネルギー設置増加に伴う電力会社の送電線網の容量不足など、さまざまな要因が密接に絡み合い、昨今の人手不足も相まって、日々試行錯誤しながら対応しています。

災害対策の面でも、BCP対策や防災無線設置等、いろいろな工事を行ってきましたが、今年は大阪北部で大きな地震があったり、そのあとすぐに西日本を襲う豪雨災害がありました。豪雨が過ぎると観測史上1位の災害レベルの酷暑や迷走台風に見舞われたりと、今年も半年程過ぎましたが自然の猛威をあらためて実感させられています。

このJIAの活動についても、取り巻く環境が大きく変わったこともあり、昔の経験が通用しないことも多くなりましたが、私たちEグループでは会員の皆様のご支援ならびにご協力もあり、グループ会議や懇親会等を開催しています。先般も毎年恒例となっています納涼屋形船



7月に開催した施設見学会での集合写真

からの施設見学会も無事に開催することができ、正会員との交流の場として大変盛り上がり、有意義な時間を過ごすことができました。

このような交流委員会の活動を通じて、建築家の方々や他の業界の方々と交流することによって、各メンバーにとってこの変革の時代を乗り切るための何かのきっかけになればと考えています。私も社会インフラを支える企業の一員として、今後、災害対策や新しい街づくり等、時代のさまざまな変化に対応していけるよう、JIA活動を協力会員メンバーとして参画していきたいと思っています。

最後にJIA活動に賛同をし、Eグループ活動にご協力いただいている正会員の皆様や協力会員の皆様に感謝するとともに、今後とも他の正会員の方々との交流や他のグループとの交流を増やしていき、引き続き交流委員会のEグループ活動を盛り上げて参りたいと思いますので、今後ともご支援のほど、宜しくお願い申し上げます。



納涼屋形船からの施設見学会



東京湾の夕景

目黒地域会

一般の方を交えての建築展見学会

高まる近現代建築への関心

日程：2018年7月25日（水） 場所：六本木ヒルズ・森美術館



目黒地域会
事務局長
伊藤 正

近現代建築への関心が高まりつつある。美術館なのに、人によっては展示されている美術よりも、器である建築目的に訪れることもあるように、「建築」が一般の人にとっても、鑑賞の対象となる兆候は世界中にある。例えば、スペインのビルバオでは、フランク・ゲーリーによるグッゲンハイム美術館を目的に観光客が世界中から集まるという現象なども起きている。

一方、日本の近現代建築は、世界の文化芸術の重要な一翼を担う存在となっているのに、ややもすると学術的、歴史的、芸術的価値を次世代に継承する体制が十分とはいえなかった。例えば、世界的にも評価の高い丹下健三による国立代々木競技場の設計図は、ハーバード大学が所有しているという。そのような状況で、文化庁は「我が国の近現代建築に関する資料について、劣化、散逸、海外への流出等を防ぐことを目的として、……また、展示や普及活動を通じ、近現代建築とその関係資料に対する国民の理解増進を図る」と、2013年に国立近現代建築資料館を開館させた。民間でもTOTOギャラリー・間や六本木ヒルズ・森美術館など、「建築」を扱う美術館・資料館も定着してきている。

建築への関心が高まるなか、六本木ヒルズ・森美術館は15周年記念展として「建築の日本展：その遺伝子のもとらすもの——世界が魅せられた日本建築、その本質に迫る！」を4月から9月まで長期開催した。

JIAも後援し、この9月の建築家大会2018東京にも組み込まれているイベントだ。開催期間が長く、いつ行か決めかねていたときに、一本のメールが私のもとに届いた。差出人はJIA目黒地域会が主催するまち歩き会や、街かどトークというイベントによく参加していただいている一般の方からだった。

「建築の日本展に行きたいのだが、同じ行くのであれば専門家の人たちと一緒にだと、何倍も楽しく見学ができると思うので、みんなで行く機会を設けてほしい」。

ご要望いただいた企画は、我々建築家同士にとっても意見交換の場として意義深く、一般の方に建築への理解

を広めながら交流を図ることは、まさにJIA活動としても理想的な姿であり、他にも声をかけ見学会を7月25日に行うことにした。

展示会場は限られたスペースであったので、美術館入口に16時に集合、各々自由に会話しながら見学し、2時間後に同じ場所に集まるという、自由行動を尊重した見学会とした。

展示会は、今の日本建築を読み解く鍵を、9つの章で編成し、古代から現代まで底流に脈々と潜む遺伝子を考察しようというものだ。日本建築の原点「木造」について、構造的側面を新旧の木組や心柱などの立体模型や図面を通して展示するところから始まり、陰翳礼讃といった光に対する日本の美意識、工芸品、西洋との出会いによる折衷様式、自然との関わりなどよく整理されたテーマごとに企画展示されている。

貴重な建築資料や模型など100プロジェクト、400点を超える多彩な展示のなかには、原寸大で再現された国宝「待庵」茶室の中に入る空間体験や、スケールをテーマとした最新技術のレーザーと映像などを駆使した3D体験型の展示もあり、かなり見応えがある。

4月から2ヵ月あまりで20万人を超える人が来場したという評判通り、当日も平日にもかかわらず盛況で老若男女、建築とは関係ないと思われる若い外国人も多く見受けられたのには少し驚いた。

見学会にはJIA会員から11名と会員外の方4名の計15名であった。一般の方より、JIA会員のほうが多かったが、さまざまな立場の人たちで自由に会話をしながらの見学のあと、下のレストランに場所を移して、懇親会を兼ねて引き続き建築談義などに花を咲かせた、楽しく有意義な見学会であった。



建築展示会場の森美術館入り口

城北地域会

分かる景観から
知らなければならぬ景感へ

無法地帯での街づくり人種の発見

城北地域会
色川善一

去る8月3日、建築家クラブにおいて、城北地域会主催のまちづくりレクチャーを開催しました。その概要を報告させていただきます。

講師を務めていただいた小場瀬令二先生は、大学での研究活動が続けられた後、練馬区でのまちづくり活動を実践されたという「研究領域」と「実践領域」の両面でのまちづくりに関わられた方です。2つの視点でのまちづくりに関するご講演をいただいたことが、今回のレクチャーのポイントであったと思います。

また、講演タイトルにある「景感」「無法地帯」といった言葉には、今回の講演対象が建築家を中心とした「専門家」であったということから、一種のアンチテーゼ的な意味合いを込めて表現をされたのではないかと想像します。

一方、これまでの景観論を紐解かれ、芦原義信氏の『隠れた秩序』や楨文彦氏の『見えがくれする都市』で主張された景観の発見は、なんとなく景観の秩序を感じるが、誰にでも分かるほど明確ではないこと。そして多少の学習によってその景観の存在が理解できるが、最大の問題はそれを形成していく方法論が明示されないまま今日に至ってしまっていることにあると論じています。

実際、景観法ができて15年経ちますが、日本の景観まちづくりは、その方法論を含めて成果を上げているのかと問われると、明快な答えを持ち合わせていないこと

に気が付きます。

しかし、方法論のヒントとして「景感」という概念を重要と提起されています。一見、無秩序な中に見え隠れする「景感」を読み解く「知眼的解釈」が必要と語られ、「景感」を説明する5つの事例を紹介していただきました。

- ①西武池袋線中村橋駅の高架橋のゲートデザイン
- ②千川通りの左右がアンバランスな市街地
- ③無法地帯での住宅管理(城南住宅)
- ④家の玄関を菜の花で飾る
- ⑤白子川の環境改善計画

(※5つの事例の詳細は、城北地域会ホームページに掲載)

専門家を含めて景観を考える人たちが、その知眼力を養い、生活に根差した景感を再評価し根付かせていくことが大切であること。そして、「すまいとみどりの指針」だけで守られてきた(いわば無法地帯の)緑豊かな城南住宅を例に、法律や制度論からの景観まちづくりへのアプローチだけではなく、地域ごとのまちづくり活動が成長していく方法論が、日本的景観形成を進めていく上で重要であるということを考えたまちづくりレクチャーでした。

当地域会としては久しぶりのまちづくりレクチャー開催でしたが、今後も新しい知見を共有する場として、次の企画を考えていきたいと思っています。



白子川で街づくり人種の発見

(提供：白子川源流水辺の会)



無法地帯の城南住宅

(撮影：小場瀬令二)

新潟地域会 月例会の活性化



新潟地域会 代表
平原 茂

新潟地域会は新潟県内の正会員29名、協力会員19社からなる小さな組織です。毎年定期的に行ってきたイベントは、県内大学卒業設計コンクール、学生課題設計コンクール、建築セミナーの3つです。

卒業設計コンクールは、県内にある建築系3大学と職能短大の計4校が参加し、各学校から5点程度推薦してもらい、公開審査で順位をつけ、最優秀の1点を全国大会に送り出すイベントで、20年続いています。課題設計コンクールは、工業高校、専門学校、大学の1～2年生を対象に、住宅課題による設計コンクールです。学外でのプレゼンテーション経験が少ない学生たちに発表の場を提供し、我々実務者と意見を交わし交流することで、建築に対する意欲を高めてもらいたいと始めたイベントで、13回目を迎えました。建築セミナーは、毎年秋に、全国で活躍されている建築家をゲストにお招きして、自作の発表を通してレクチャーをしてもらう、学生や若手実務者を対象としたセミナーです。

これらのイベントは歴史もありそれなりに盛り上がるのですが、それ以外の月は全く活動がありませんでした。毎月定例会を第3金曜日に開催していますが、事務連絡やイベントの準備状況の報告などが主な内容で、参加者もひと桁程度の月が続いていました。

新潟県は東西に細長く、1か所に会員が集まることはなかなか困難です。それでも魅力のある定例会になれば出席率も上がるはずと知恵を絞ったのが、定例会で会員が講師になり1時間程度レクチャーをすることでした。普段は会員同士でもめったに会う機会はありません。自分の考え方や作品を発表したり、趣味や関心を持っていることを紹介するなど、テーマはなんでもよいのです。正会員だけのレクチャーではすぐ順番が回ってくるので、協力会員と交互に回すことにしました。協力会員にとっても自社の製品や業界の話題などをJIA会員に紹介できることはメリットです。

まずはやってみようと思ったのが2017年の2月でした。プロジェクターで作品を映しながら解説していきます。質問も活発に飛び交い、お互いの作風が分かるにつ

れて、会員同士の距離が縮まったように感じられました。

ある会員は図面を展示しました。1本が20～30mもあるロール状の巻紙に、1件のプロジェクトの図面がすべて手で描かれていました。基本図やパース、そして原寸の継ぎ手や仕口まで表現されています。建物を引き渡した後に竣工図として作成しているのだそうです。そんなロールが何本も会場に持ち込まれました。手描きの図面が発揮するエネルギーにただただ圧倒されました。

協力会員のレクチャーも活発になってきました。当初は自社製品の紹介を行儀よくやっていたのですが、回を追うごとに肩の力も抜け、本音が聞けるようになりました。開発時に参考にしたライバル社の商品との優劣など、興味深い話が出るのも小さな内輪の会ならではの。

始めてから1年が経ち、ようやく軌道に乗ってきて、会員の出席率も3～5割程度は上がってきました。今年度からは新潟市や県の役人を講師に招いて話をしてもらう予定を立てています。今までは行政との結びつきが弱く、役所側の認知度が高いとはいえない状態でしたが、これをきっかけに少しでも良い関係が築けたらと思っています。6月には新潟市の建築部長をお招きして、新潟市の公共建築の目指す方向や、設計者の選定方法についてレクチャーをしていただきました。行政側の公式の立場と個人の本音も聞くことができ、そのあとの懇親会も大いに盛り上がりました。

また今年からはこのレクチャーにCPDも付くようになりました。講師役が一巡するまではこの流れで続ける予定です。今後どんな発表が飛び出すか興味津々です。



定例会でのレクチャーの様子

景観まちづくり協議会と 「景観デザインレビューのススメ」



都市・まちづくり
委員会
砂金宏和

■景観まちづくり協議会

「景観まちづくり協議会(建築等を通じた良好な景観形成・まちづくり推進協議会)」は、平成15年に策定された「美しい国づくり政策大綱」と景観法制定を契機に、建築の視点から景観問題を見つめ直し、設計者に向けたメッセージを発信することを目的とした「良好な景観形成のための建築のあり方検討委員会」(座長 山本理顕氏)の提言をうけ、建築5団体(JIA、建築士会、設計事務所協会、建築学会、建設業協会)と景観やまちづくりに積極的な地方公共団体により、平成21年に設立された組織です。

■協議会の活動

協議会は「建築等を通じた良好な景観形成・まちづくりに関する情報発信、普及啓発、政策提言」を行うことを事業内容とし、これまで国交省「まちづくり担い手事業」の対象団体選定補助や景観づくり専門育成等について検討してきました。(柳澤厚氏を座長に各会から2名の委員を派遣しWGを組織し活動実施)

現在は良好な都市景観形成を進める方策として、地域景観に影響を及ぼすプロジェクトに対し、開発事業者・設計者と建築家等の専門家、行政担当者が対等な立場で協議・調整を行う「景観デザインレビュー」の仕組みを提言し、冊子『景観デザインレビューのススメ』を編纂・普及に努めています。(国交省より各自治体建築指導部に送付、JIAでは昨年の徳島大会全国まちづくり会議で報告の上で各支部・地域会に冊子配布)

■景観デザインレビューのススメ

冊子は、「入門編」「理念編」「実践編」の3分冊で構成していますが、大きな特色は「多くの地域での仕組みの導入」を目的の大きな柱とし、自治体の景観行政担当者を念頭に置いた編集をしていることです。

入門編は、自治体担当者に向けてデザインレビュー開催の目的・意義や実施の効果を解説。

理念編では、CABEで培われたノウハウを参考にレビューを実施する上で重視すべき視点(まち・都市の視点での評価)や参加構成員とその果たすべき役割等を解説。

実践編では、レビュー進行の方法、参加者それぞれの役割、開催の時期、実施に際して用意すべき素材等の他、開催に必要な費用とその分担等についても解説し、レビュー開催のノウハウを簡潔に紹介しています。

■普及のための活動とJIAの取り組み

協議会では仕組みを普及させるために冊子解説と建築を通じた景観デザインレビューに関するシンポジウムを行う「景観デザインキャラバン」を、平成28年度は鶴岡・酒田および岡山・倉敷で、平成29年度には静岡と福岡で開催しました。

キャラバンは協議会が企画・開催していましたが、本年度(平成30年度)からは、建築諸団体(士会、事務所協会、JIA)が主体となって、景観デザインレビューを仕組みとして定着させていくため、地域の建築家と自治体職員の方々等に、冊子の解説をして意見交換する会「景観デザインレビューガイダンス」を行い、できるだけ多くの地域で実施できるよう呼び掛けています。

JIAでは、渋谷地域会が主体となって、今秋にガイダンスの実施を計画している他、建築まちづくりと都市・まちづくり委員会の共催での実施を検討しています。

■景観デザインレビューの普及に向けて

景観法や自主条例に基づくデザインレビューの仕組みを採用する自治体は徐々に増えていますが、審議会などでの「審査」といった形態のものが多く、関係者が対等な立場で協議できる仕組みはほとんど普及していません。都市・まちづくり委員会では、各支部・地域会の皆様とともに、他団体とも協力しながら自治体の協力を得て「景観デザインレビュー」の普及に努めていきたいと考えています。



3冊で構成された冊子「景観デザインレビューのススメ」

わたしの愛用ツール

建設現場やオフィスで、皆さんはどんなツールを使っていますか？

新コーナー「わたしの愛用ツール」では、皆さんが普段仕事で使っている愛用品やマストアイテム、人に薦めたい便利なツールなどを紹介します。

今回は、建築家にとって欠かせない「スケール」と、スマホやタブレット端末で使える「アプリ」を紹介していただきました。



3つのスケール

三浦清史



「ヒアシンスハウス」にて、左が樹脂製のメジャー、上がルーローの三角形のコンベックス、下が瓦宇工業所の年表

古い木造を観に行く機会が多いので、金属ではないメジャーは必需品。木部を傷つけず寸面などを知るためにである。布製のものを使い古してしまってから、今では無印良品で手に入れた少し洒落た樹脂のものを愛用している。

ジオ・ポンティに憧れたせいか、中ぶくらの三角形が好きになって、つい買ってしまったコンベックス。確か彫刻の森美術館のミュージアムショップで、デザイナーものだろうか。テープは細すぎて根性がなく、内法を測るにも苦労だが、好きな形というだけで、いつも鞆の中にある。

3つめは瓦宇工業所の小林章男さんからいただいた年表。西暦と年号が実感できない僕には四次元のスケールとして必須のアンチョコで、ノートの栞としても重宝だ。(こうだ建築設計事務所)

アプリ「Sun Seeker」

長澤 徹



現場で敷地を確認する際に、日当たりは毎回気になる場所。

周辺の建物の高さや位置まで正確に測量するか、すべての季節で現場を確認できた上でプランニングできればよいのだろうが、実際はそんなにうまくタイミングが合わないこともしばしば。

そんな時、私はこのアプリを使って日当たりをだいたい確認している。カメラモードもあり、リアルタイムで見ている景色上に今日の太陽の通過ライン、さらに夏至、冬至の太陽の通過ラインが表示される。

直感的にすぐわかるので、クライアントにも好評なアプリです。

(ポーラスターデザイン)

アプリ「Tayasui Sketches」 (Pro Version)

倉島和弥



720円で有料版のPro Versionにアップグレードすることができます



年配の方は顔を顰めるかもしれない。創造は肉筆であるべきだ……。

イラストアプリ「Tayasui Sketches」は、iPadやiPhoneでApple Pencilと組み合わせる。筆圧表現ができる。肉筆に近い。レイヤー、透過調整可能。デジタルなアナログだ。

さらに、定規もある。アナログでは持ちきれない道具がある分、表現が多様。ペン一本で鉛筆もペンも筆もブラシもスクトンも。

筆圧表現はできるが紙のような感触のないのが寂しいだけ。硬い。仕方ない。だけど、だらだらとベッドの中でテレビを観ながらリラックス状態でペンを動かすにはもってこい。グリッド下地もあるのでスケールはないが何とかなる。仕事から遊びまで楽しめる。

(RABBITSON)

■皆さんの愛用ツールをぜひご紹介ください！詳しくは、p.29の『Bulletin』原稿募集をご確認ください。

『Bulletin』掲載の活動報告をHP掲載に切り替えます

今号より、JIA関東甲信越支部会報誌『Bulletin』の内容をリニューアルします。

広報委員会では、JIA関東甲信越支部のサイト（ホームページ）を今年1月にリニューアルし、委員会や地域会、部会の各種イベント・セミナーの告知や報告を、関係者・主催者がサイトに直接アップできるようになりました。

一方、これまで『Bulletin』では毎月持ち回りで「委員会活動報告」「地域会だより」「部会活動報告」を掲載していましたが、2017年度から年間7号発行から年間4号発行（季刊発行）に変更したため、活動報告等の記事をタイムリーに誌面に掲載することができず、もどかしさがありました。

支部サイトリニューアルから半年以上経過し、さまざまな活動の告知、募集、報告が日々サイト上に活発にアップされるようになってきましたので、『Bulletin』での活動報告を今号から廃止いたします。これまで執筆にご協力くださり、ありがとうございました。

今後、活動報告は基本的に支部サイトに掲載していただき、JIA会員だけでなく、より多くの方にJIA内の活動を知っていただけるよう、ご協力をお願いいたします。広報委員会としましても、支部サイトが情報発信の場としてさらに充実したものになるよう、努力してまいります。



関東甲信越支部のサイト。サイトトップ画面の「ACTIVITY & EVENT」に告知や活動報告など最新の投稿記事が並びます。

持ち回りの活動報告の執筆はなくなりますが、『Bulletin』ではこれからも委員会、地域会、部会の取り組みを掲載してまいります。積極的な掲載依頼は随時受け付けていますので、今後ともご協力をお願いいたします。

タイムリーな情報をいつでもどこでも得られる支部サイトと、じっくりと読み込んでもらえる情報をお届けする会報誌『Bulletin』。どちらもこれからも楽しみにしててください。

（『Bulletin』編集長 長澤 徹）

支部会報誌『Bulletin』原稿募集

■ 海外レポート（自薦、推薦）

海外レポートは、海外で活躍されている方から、その国の建築に関わることについて紹介しています。海外との交流や国際会議、見本市などの参加報告でも結構です。自薦、推薦どちらでも構いません。ぜひ編集部へご連絡ください。

- ① 文字数 2,500文字程度（2頁）
- ② 写真、図版 2～3点程度（JPEG形式）
- ③ 執筆者の顔写真（JPEG形式／白黒での掲載になります）
- ④ タイトル
- ⑤ 図版キャプション
- ⑥ お名前、事務所名、電話番号、E-mail

■ 他人の流儀（推薦や話を聞きたい人）

連載中の「覗いてみました他人の流儀」について会員の皆様からのご意見を募集しています。この人に聞いてほしいという実名でもかまいません。老若男女を問わず、ど

んな業種でもアタックしたいと思います。ご意見を編集部へお寄せください。

- ① インタビューをしてほしい方の実名
- ② インタビューをしてほしい方の業種や分野など

■ ひといき（投稿）

巻末に、長年続けている趣味や関わっている活動のこと、普段考えていることや日常の些細な出来事など、さまざまな話題をコラムでご紹介しています。

タイトル通り、気軽な文章大歓迎です。会員の皆様からの投稿をお待ちしております。

- ① タイトル、サブタイトル、見出し、クレジット等部分100文字以内
 - ② 本文、400文字以内（テキスト形式）
 - ③ 記事に関する写真を1～2点（JPEG形式）
- ※なお、執筆者の顔写真は掲載しません。

■ わたしの愛用ツール

新コーナー「わたしの愛用ツール」では、皆様が普段仕事で使っている愛用品やおすすめアイテムを紹介します。長年使っている愛着のあるものや、建築家の仕事に役立つツールなど、文章と写真でご紹介ください。投稿をお待ちしております。

- ① 文字数 300文字程度
 - ② 写真や図版 1～2点（JPEG形式）
- ※掲載時期は広報委員会に一任願います。

■ ご意見・ご要望受付、お問い合わせ先

JIA 関東甲信越支部事務局 大西
E-mail : mohinshi@jia.or.jp
TEL : 03-3408-8291
FAX : 03-3408-8294

「こども職業体験(こどもお仕事まつり)」に参加して

夏休みの終わりに、足立区の地域学習センター主催の「こども職業体験(こどもお仕事まつり)」に初めて参加させていただきました。

知人を介して地域学習センターから連絡があり、「子どもたちにさまざまな専門家の仕事を体験してもらおう企画があり、その中で建築家のお仕事体験に協力してもらえませんか」と声をかけていただきました。話を聞くと過去にも、ダンサー、保育士、ウェディングプランナー、お笑い芸人などバラエティに富んだ職業体験が実施されており、「折角の機会なのでぜひ協力させてください」と返事をしたものの、子どもたちに建築家のことや建築の魅力について、どう伝えようか、職業体験として何をしてもらおうかいろいろ思案しました。

やはり建築家なのだから、空間をデザインすることを体験してもらおうのがいちばん良いだろうと思い、住宅部会で子供向けイベントとして企画した輪ゴムと割り箸で空間を作るワークショップに参加したことを思い出し、早速その主査をしていた市村宏文さんに相談をしてみました。実施にあたりいろいろなアドバイスをもらい、そして当日のサポートを買って出られるなど、背中を押してもらいました。



輪ゴムと割り箸を使い、上手に組み上げていく子どもたち

当日は、1組(10名)の体験時間が1時間しかない中で(2組を実施)、何とか皆が空間を作る楽しさを感じられるように私たちも必死でした。当然ですが子どもは一人ひとり皆違い、とにかく私たちに話しかけ見守られ作業を続けたいと安心できない子、逆に無口になり一人で黙々と作り続ける子、私が作った参考モデルを壊し、輪ゴム、割り箸を撒き散らす、とにかくわんぱくな子……。大変でしたが、汗をかきながら真剣に輪ゴムと割り箸と向き合ってくれた子どもたちとの時間は、逆に自分が、子どもたちに胸を張れるような仕事をやり続けることを意識させてもらった貴重な経験でした。(宮島 亨)

〇〇の秋

編集後記

■収穫の秋。実家で稲刈りから稲こなし、餅つき用の薪の切出しや田起こしと忙しい週末が続きます。(上原)

■食欲の秋ですね。今年から料理と弁当に目覚め日々格闘してます。ただ毎回、料理というより理科の実験のようでレシピは必須です。(長澤)

■生ハムの秋。建築家大会クロージングパーティーで2本切ったと思ったら、個人主催のパーティーでも予定されています。秋だけで4本切りに挑戦です。(中澤)

■安室ちゃん引退に始まる音楽の秋。「コンサート行きたい！」と願う3歳児に、「引退」をどう説明しようか悩みつづ母娘でのDVD鑑賞の日々です。(有泉)

■スポーツの秋。仕事に追われて運動不足。涼しくなったし走ろ。(古谷)

■急にやってきた秋。夏気分が納まらないまま、気が付くとずっと先だと感じていたいろいろな締め切りが秋と共にやってきました。(中山)

■イベントの秋。今年はアルカジア大会、JIA全国大会、他イベント満載で充実の秋でした。(立石)

■健康の秋。今年の夏は、思いがけず体調を崩して人生初の入院。秋はとにかく養生に努めます。(会田)

■一瞬の秋。夏の強烈さのせいか、春と秋が短く感じられます。短期間だからこそ堪能したい！(清水)

■心地よい秋。私にとって秋がいちばん心地よいですね。夏の暑さから解放され、食欲も増し、行動範囲も自然と広がります。そんな心地よい秋も年々短くなってきているような気がします。(吉田)

編集 : 公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会

委員長 : 市村宏文

副委員長 : 長澤 徹

委員 : 会田友朗・有泉絵美・小山将史・清水裕子・中澤克秀・
中山 薫・古谷俊一・吉田 満

編集長 : 長澤 徹

副編集長 : 小山将史

編集ワーキングメンバー : 有泉絵美・中山 薫・八田雅章・立石博巳・
会田友朗・上原和彦・古谷俊一・吉田 満

編集・制作 : 南風舎

Bulletin 277 2018 秋号

発行日 : 平成30年10月15日

発行人 : 浅尾 悦子

発行所 : 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA 館

Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294

印刷 : 株式会社 協進印刷

■ JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧

・ (公社) 日本建築家協会 (JIA) <http://www.jia.or.jp/>

・ JIA 関東甲信越支部 <http://www.jia-kanto.org/>

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2018

JIA 建築家大会 2018 東京

TOKYO 2018

2018年9月13日(木)-15日(土)

JIA 建築家大会 2018 東京は無事終了いたしました。

多くの皆様にご参加していただき、ありがとうございました。

また、この会をご後援、ご支援していただいた皆様にお礼を申し上げます。

本大会は、全国から約800人をお迎えし、盛大に行うことができました。アルカジア大会は学生も含め、約1,000人が来日いたしましたので、JIAが主催する大会としては2011年のUIA2011東京大会以来の規模となりました。

今後は、報告書の形で、皆様にとしっかりとアルカジア大会とJIA大会の報告とともに今のアジアの状況をお伝えしていきます。本大会は、会員の交流と情報交換にとどまらず、JIA会員外も対象とした、建築家の役割を社会に発信するさまざまな仕掛けを試みました。本大会の意義を確実な成果とするために、今後も多くの課題に取り組んでいく所存です。

今後もJIAに対する皆様のご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

関東甲信越支部長／大会実行委員長

藤沼 傑



■ 次年度のJIA 建築家大会は、2019年10月17日(木)～19日(土)に青森県弘前市で開催する予定です。

INAX



これはもう、ひとつの作品です。

NOBLE BLACK

自分に戻る、自分だけの場所。
だから、とっておきのものを選びたい。
製品を超えて、作品と呼べる領域へ。
サティス ノーブルレーベル

SATIS NOBLE LABEL



NOBLE TAUPE

キレイがつづくトイレ **INAX**

LIXIL Link to
Good Living

お客さま相談センター ☎ 0120-179-400 受付時間：平日 9:00～18:00 土・日・祝日 9:00～17:00